

鵜沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 1 9 号

遊行上人と時衆の時代	小池 清志 ...1
〈歴史散歩〉 尾日向邸を訪ねて	刀根 恵子...16
鵜沼の登録有形文化財	岡田 哲明...18
Coffee Break	36
〈事業報告〉 鵜沼地区公民館まつりで展示参加	38
平成をふりかえる — 鵜沼周辺と鵜沼を語る会の出来事	40
海の不思議(海難の謎のエピソード)	内田進之助...49
『鵜沼雑記』(三) クゲヌマラン	古志 秋彦...54
鵜沼を巡る千一話より 片瀬川 引地川	渡部 瞭.....57
活動の記録(令和元年7月~12月)	63
編集後記	66

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鵜沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる

鵜沼を語る会 発行

『遊行上人と時衆の時代』

—— 一遍上人・真教上人・吞海上人 ——

藤沢市文化財保護推進員 小池 清志（会員）

一遍上人は死に際して「わが亡骸（なきがら）は野に捨て、けだものにはどこすべし」と遺言した。このように凄絶な語を遺した宗教家が他にいただろうか？私の心は深くえぐられた。

2019（令和元）年9月7日（土）～11月10日（日）遊行寺宝物館で、『時宗二祖上人七百年御遠忌記念『真教と時衆』特別展』が開催された。

この間10月5日（土）～11月10日（日）清浄光寺（遊行寺）と連携して神奈川県立歴史博物館で同テーマの特別展が開かれた。

また、9月13日（金）～11月10日（日）小田急湘南ゲイト6階の藤沢市民ギャラリーにて『『一遍聖絵（ひじりえ）』を開く』展も催された。

まさに今年の宗教界は“時宗の年”といっても過言ではなかった。

1. 「じしゅう」の表記方法

読者諸氏は表題には「時衆」と記され、イントロでは「時宗」となっていることに、とまどいを覚えるに違いない。

一遍や真教が「南無阿弥陀仏」の念仏を勧めて、各地を遊行した時代、遊行上人と行を共にした僧尼や俗人は、世間から*「時衆」とよばれた。やがて中世の鎌倉時代・室町時代を通して*「時衆」は教団の名称ともなった。

*時を定めて、一日に6回の念仏修行を行うことから、そう呼称された。

現在用いられている「時宗」の表記は、諸宗寺院法度（はつと）により、幕府の宗教統制が行き届いた江戸時代以降に定着した。「時宗」の文字が記載された公式文書の最初は1633（寛永10）年の「時宗藤沢遊行寺末寺帳」にて用いられた。

そこで本稿では主に鎌倉時代を対象にしているので、その際は「時衆」の字を用い、近世～現代の視点で時宗に触れる時は「時宗」の文字を用いているので、あらかじめご了承ください。

2. 国宝「一遍聖絵」と国重文「遊行上人縁起絵」

「一遍聖絵（ひじりえ）」は、一遍の没後 10 年、1299（正安元）年 8 月、一遍の弟聖戒（しょうかい）が編述し、絵師法眼円伊が描いた絵巻物で、全 12 巻に一遍の生涯を描いている。

「遊行上人縁起絵」は全 10 巻中宗祖一遍について触れた部分が 4 巻、後の 6 巻が真教の行状について描かれている。明らかに一遍よりも真教に比重が置かれている。

その理由は、この作品の奥書に出ている。編集者であり真教の弟子である宗俊が、師の教えから受けた恩徳を思い、その報恩のために真教の生涯の事績を作品にまとめたものだからである。（引用、特別展「真教と時衆」のカタログより）この作品の成立年代は明確ではなく、1303（嘉元元）年～1307（徳治2）年の間と推定される。

「一遍聖絵」と「遊行上人縁起絵」との大きな差異は教団意識の差異である。

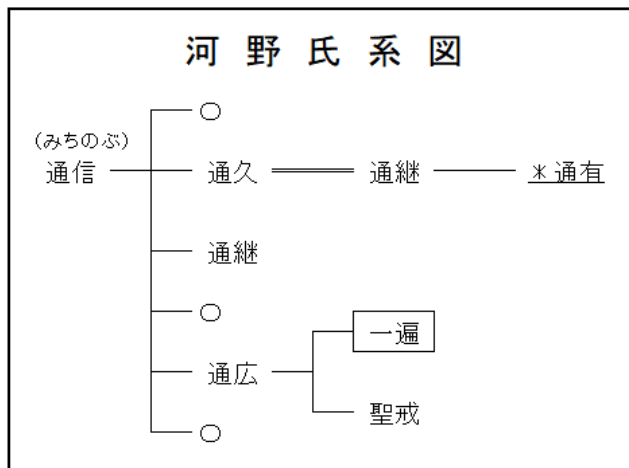
一遍は、その死に先立ち「我化導（けどう）は* 1 一期（いちご）ばかりぞ」という信念のもとに、所持した聖教（しょうぎょう）の類を「阿弥陀経をよみて、手づから焼き」捨て、また聖教の一部は播磨国* 2 書写山の僧に贈るなどして、教団の相続を毛頭考えなかった。

* 1. 一代かぎり * 2. 西の比叡山といわれた

「聖絵（ひじりえ）」には教えそのものは、ほとんど記されていない。いわば一遍の生涯の行動歴を記録に留めたいとの、弟聖戒（しょうかい）の意図のままに、編集したとされる。一遍聖が神格化された表現になっていないのもその為である。

3. 「一遍聖絵」にみる一遍上人の生涯

一遍は、1239(延応元)年に伊予国(愛媛県)の豪族河野通信(みちのぶ)の五男である通広の、二男として生まれたとされる。幼名を松寿丸という。1248(宝治2)年10歳で母を亡くしたのをきっかけに出家した。



G-1 河野氏の家系

河野氏は越智（おち）氏の一族で、両氏は協力して西瀬戸内海の制海権を掌握していた。

一遍の祖父河野通信は、源平合戦にさいし、1180（治承4）年に源頼朝が反平氏の兵を挙げると、それに呼応して1181（治承5）年に挙兵し、平維盛（これもりの目代（もくだい、代官のこと）を追放した。1185（文治元）年源義経が平氏追討のため四国へ下って来ると、通信は軍船を率いて屋島へ赴き、軍船を献上して源氏方へ加わった。壇ノ浦の戦いにも参加し、通信は大活躍した。戦後は鎌倉幕府の御家人となり、1189（文治5）年の奥州合戦に従軍。頼朝の義父、北条時政に気に入られてその娘を娶った。

ところが、1221（承久3）年に起きた承久の乱では、後鳥羽上皇の朝廷側につき、敗北し降伏すると捕えられて、奥州平泉（岩手県）に配流され、そこで亡くなり、江刺（北上市）の墳墓に葬られた。（のちに一遍は祖父の墳墓を訪れている）



一遍上人像（遊行寺境内）

一遍の父通広は若くして出家したので、承久の乱には関係しなかったようである。浄土宗の証空の下で修行し如仏と名乗ったが、一遍が生まれる数年前、故郷伊予へ帰り、還俗して妻を娶ったものである。

*河野通有 （前ページ系図参照）

一遍といとこ。1281（弘安4）年の第2次元寇の際、伊予の水軍を率いて参戦。博多湾の上陸阻止用の石塁を背にして陣をはり、豪胆ぶりをうたわれる。博多湾口の志賀ノ島の戦いでも、元船に夜襲をかけ敵将を捕らえた。

G-2 一遍、九州での修行と父の死

一遍の出家は、父のはからいが大きかったとみえ、かつて証空のもとで学んでいたときの旧友、すなわち相弟子の聖達に一遍を託した。一遍が九州で学んでい

た期間は 1252（建長 4）年から 1263（弘長 3）年、14 歳から 25 歳までの 11 年間であった。その時父の訃報が一遍のもとに届いた。急ぎ故郷に帰ったが、河野家の家督を継ぐことになり結婚もした。子供も生まれしばらくは平穏と幸せな生活が続いた。

G-3 再び出家

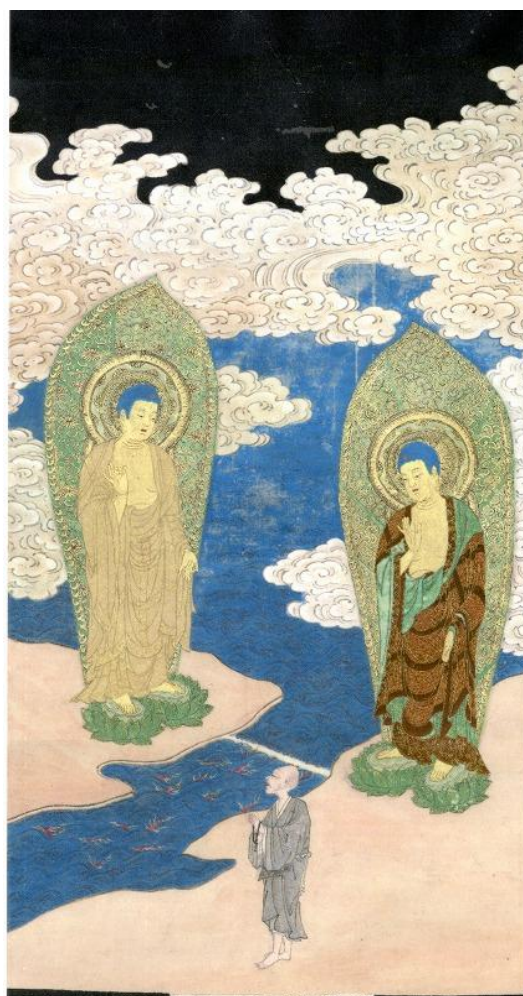
それから 5 年後、世の中は大きく動き出した。1268（文永 5）年蒙古の使者が大宰府に来て通交を促した。北条時宗はこれを追い返している。日蓮が外寇を警告したのもこの年である。幕府は西国の武士に臨戦態勢を命ずる。

一遍はその頃一族の内紛に巻き込まれ、ある日その者たちに襲われたが、一遍は屈強な武士でもあったので、逆に撃退した。その事があって、一遍は俗世に嫌気して、再び出家しようと決心すると、1271（文永 8）年春、信濃の善光寺に参詣し、唐の善導大師が唱えた二河白道説を深く感じ取り、一遍自らそれを絵に描いた、それが「二河白道図」である。釈迦と僧侶（一遍？）のいるのが、此岸。向かって左阿弥陀如来のいるのが彼岸、西方極楽浄土。その間を隔てるのが、* 1. 火の河と* 2. 水の河。二つの河に挟まれた* 3. 細く白い道が極楽浄土への架け橋であるととらえた。

* 1. 火の河・・細く白い道の左側。衆生の怒りと憎しみの心。

* 2. 水の河・・細く白い道の右側。衆生のむさぼりと欲の心。

* 3. 細く白い道・・浄土往生を願う清浄な信心。



二河白道図（遊行寺蔵）

G-4 一遍ら遊行の旅に出る

それから3年後の1274(文永11)年、一遍を先頭に超一・超二・念仏房、最後に弟の聖戒が続いて、五人は伊予の自分の家を出発した。ただし聖戒は見送りで、伊予の桜井(愛媛県今治市)で一行と別れた。(一遍・聖戒兄弟が次に会うのは、一遍が死の間近であった兵庫・観音堂においてであった。)この年の10月は第一次モンゴル来襲というかまびすしい世の中であった。



念仏札

G-5 初めての賦算

賦算とは、念仏札を配ることである。伊予の国を発った一遍たちは、しばらくして海路摂津国の四天王寺(大阪市)に参詣した。

今は地形が変わっているが、鎌倉時代の頃は四天王寺の西門は大阪湾に面していた。

一遍は、善光寺が信者の極楽往生を保証する「御印文」にヒントを得て、自ら考案した『南無阿弥陀仏 決定(けつじょう)往生六十万人』と書かれたお札を、四天王寺へ参詣に来た人々に配って、念仏をとなえることを勧めた。



証誠殿で神託の図

G-6 熊野成道(悟りを開く)

その年(1274年)の夏、高野山に参詣した一遍は、熊野古道を通り、熊野神社を目指した。その熊野山中である僧侶(実は熊野権現)に出っくわした。

一遍はこの僧に「念仏札」を渡そうとしたが、僧は「私は念仏僧ではないから」といって受け取りを固辞した。にもかかわらず一遍は無理やり押し付けた。その後熊野本宮への道すがら一遍は信心のない者に強引に押し付けて良かったのかどうか悩んだ。

一遍は間もなく熊野本宮に着いた。祭神は本来家津御子神(けつみこのかみ)であるが、平安末期の頃には、本地垂迹説(ほんじすいじゃくせつ)の影響で、本地は阿弥陀仏、熊野の地が阿弥陀浄土であ

るという信仰が生まれた。

一遍が熊野本宮証誠殿（しょうじょうでん）に参籠し、自分の悩みを神に打明け、神託を乞うと、御殿の戸が開き、白髪で長頭巾をかぶった山伏姿の熊野権現が現れ、「御房（坊、おんぼう）の勧めによって、極楽往生できるのではなく、一切衆生（しゅじょう）は阿弥陀仏の誓願によって、極楽往生が約束されているのだから、人が『信ずる・信じない』にかかわりなく、「浄不浄をきらわず」御房（一遍のこと）は念仏を勧め、念仏札を配るがよい」との託宣を聞いた。その瞬間一遍の迷いは雲散霧消し、悟りを開いたのである。

この時をもって、のちの時宗教団では一遍の立教・開宗の時と定めている。

一遍たちは本宮をあとに熊野川を舟で下り、新宮へ（那智速玉大社）。6月13日、新宮から伊予桜井で別れた弟の聖戒に手紙と共に念仏札を刷る版木を送った。次に那智社へ参詣した。当時の那智の滝は、現在とそっくりに描かれている。



信州・佐久「小田切の里、初めての踊り念仏」武士の屋形（大井太郎）の縁側で鉦をたたいているのが一遍。

G-7 九州遊行のさい、真教入門

1276（建治2）年一遍は九州を遊行し、大隅正八幡宮（現在の鹿児島神宮）に

参詣したのち、豊後府内（大分市）では、*大友頼泰（よりやす）の帰依を受けた。
*大友氏はもとは相模武士、本貫地は小田原市の大友郷。

頼泰の館で一遍・真教（二祖）は初めて会ったといわれる。真教はその場で一遍に弟子入りし、これ以後一遍が死ぬまで遊行の旅に随従した。

G-8 信濃国佐久郡小田切の里で踊り念仏始まる

1279（弘安2）年信濃善光寺に赴き、その冬小田切里（現佐久市）の、ある武士の館で、歳末の別時念仏が開かれた時、時衆は鉦鼓を叩きながら、高らかに念仏をとええるうちに、気分が高揚して、自然に跳（と）んだり跳（は）ねたりしながら、踊りだしたのである。それが「踊り念仏」の最初といわれ、踊躍（ゆやく）念仏ともいう。これはのちの盆踊りの起源とされている。

G-9 一遍、鎌倉入りを拒まれる



一遍鎌倉山ノ内（現北鎌倉駅付近）で、執権北条時宗代官により、鎌倉入りを阻止される。

1280（弘安3）年奥州江刺（岩手県北上市）で祖父河野通信の墓参りを済ませ

ると、南下して平泉・松島をまわり、常陸国（茨城県）をへて、*1281（弘安4）年には武蔵国を遊行する。 *1281年は第2次元寇のあった年である。

1282（弘安5）年3月1日、*ながさごを發ち、小袋坂から鎌倉へ入ろうとした時、北条時宗の代官によって制止された。踊り念仏が流行し、その熱狂が鎌倉の秩序を乱すものとして忌避されたからであろう。（一遍の一行は旅の埃にまみれて乞食の姿同様に見られたからだ、という説もある）

*「ながさご」は現在の横浜市港南区、地下鉄「上永谷」駅付近、現地名の「永作（ながさく）」と、考えられている。

G-10 片瀬の浜の地藏堂で踊り念仏

そこで一行は北鎌倉山ノ内辺り（現光照寺付近）で、一夜を明かし、翌日手広經由で江の島の対岸へ出る。それから、7月16日片瀬を發つまでの4ヶ月以上、片瀬に踊り屋を建てて、そこで踊り念仏を修した（踊り念仏は娯楽ではなく、修行の方法の一つだった）。しかしその形態はそれまでと全く違っていた。

それまでの踊り念仏は貴賤上下なく、集まった者たちが輪になって踊るものだったが、片瀬では、やぐらを組んだ小屋を建て、その上で踊っているのは僧尼だけである。集まって来た貴賤道俗はそれを見上げている見物人である。

幕府の意を受けて、秩序を重んじた為であろうか。



片瀬の浜の地藏堂「踊り屋」（一遍聖絵）



江ノ島と片瀬（遊行上人縁起絵）

左側が江の島、右側が片瀬。河口は片瀬川（境川）。「一遍聖絵」・「遊行上人縁起絵」とともに江ノ島での一遍の姿は出てこないが、4ヶ月以上片瀬にいたのだから、きっと行ったことだろう。

G-11 一遍の京都布教

1284（弘安7）年閏4月16日、一遍と時衆は近江国大津から京都に入った。一遍を迎える京の人々で、一遍のいる四条京極の釈迦堂辺りはごった返して、牛車の方向転換もできない有り様だった。数日後、一遍の心の師である空也（平安時代中期の念仏僧）が布教の拠点にしたという市屋町（市が立つ）で、踊念仏を挙行了した。

次に鳥辺野の入り口に、空也が開いた六波羅蜜寺を訪れた。「徒然草」に出てくる鳥辺野の煙とは、死者を火葬に付す煙である。六波羅には「六道の辻」と呼ばれるあの世とこの世の境をなす場所がある。きっと一遍は六波羅一帯に眠る亡者の鎮魂のために訪れたのであろう。

京都には48日間滞在したが、その間に、名前ははっきりしないが、前内大臣土御門入道なる高級貴族も一遍に結縁を求めて訪ねて来ている。

G-12 中国・四国地方の布教

1285（弘安8）年～1288（正応元）年、一遍47歳～50歳の遊行は、丹後国・但馬（たじま）国・因幡（いなば）国・伯耆（ほうき）国・美作（みまさか）国。播磨国書写山に参詣したのち、備後（びんご）国（広島県）一宮・吉備津神社に参詣し、安芸（あき）国一宮・厳島（いつくしま）神社に参詣。1288年伊予国（愛媛県）に渡り、12月16日河野氏の氏神である大三島の*大山祇（おおやまづみ）神社に参詣。

*現在宝物館は、国宝8点、重要文化財468点等、武具類を中心に多数の美術工

芸品を展示・公開している。

G-13 一遍、兵庫で示寂

1289（正応2）年讃岐の善通寺を巡り、6月1日阿波の大島の里で発病。7月のはじめ、淡路島へ。7月18日明石へ渡り、そこへ兵庫（現神戸）から迎えの舟が来たので、その船で兵庫の観音堂（現時宗の真光寺）へ入った。

8月10日朝所持していた書籍等、持ち物を自ら焼いてしまい、「南無阿弥陀仏」と称えながら臨終を待った。8月23日朝7時頃、晨朝（じんじょう）の礼讃をとなえる中、往生した。「没後の事は、我が門弟においては葬礼の儀式をととのふべからず。わが身は野に捨ててけだものにほどこすべし」と言い残して、51歳の生涯を閉じた。

4. 二祖真教上人

一遍がすでに臨終を予感しながら、横たわる病の床へ真教がやって来た。一遍が「南無阿弥陀仏はうれしきか？」と真教に問う。真教は答えず、ただはらはらと涙をながした。それを見た一遍もはらはらと涙を流した。二人の心底には言葉にならない通じ合いがあったのである。

一遍が亡くなると、時衆は一人消え、二人消えて、いつかバラバラになってしまった。真教は考えた。あの遊行の時の熱狂はどこへいつてしまったのだろうか？一遍上人の教えを後世に遺すにはどうしたら良いのだろうか？

一遍はほとんどお寺を建てなかったし、本尊も造像しなかった。仏像よりも究極の本尊は「南無阿弥陀仏、決定（けつじょう）往生六十万人」と書かれた念仏札と考えていたのである。

二祖他阿（他阿弥陀仏の略）真教は、時衆教団の強化・確立を図ろうとした。

信者たちは遊行集団が通り過ぎたあと、時衆僧の*聖教（しょうぎょう）も聞けなかったし、仲間たちの紐帯を深める場所も無かった。信者は個々に孤立してやがて時衆からは消えていった。 *聖教・・釈迦や聖者の教えのこと

真教はその欠点を克服するため、信者たちの拠り所として、地域ごとに道場（時衆では踊り念仏も修行）を建設することであった。すなわち寺院の建立であった。お寺には念仏札に代わって、仏像が本尊として安置され、信者はそれを毎日でも拝めるようになった。何よりも自分が困ったこと悩みを直接僧侶に相談できるようになったことである。しかし他方で真教は、時衆が教団として後世に伝わるために、規律と行儀を整えた。行儀とは仏教用語で、行為の規則とか、行事とか儀

式を指す。また 1306（嘉元 4）年には、時衆が寺院生活で守るべき規則として「道場誓文」を著わした。

◎真教の教団改革の具体的骨子

今や時衆のお寺が北は東北から南は九州まで広がると、時衆として一定の共通性が必要とされた。そこで、下記のような改革が行われた。

1. 道場や寺院を建立
2. 祖師像を礼拝の対象とする。（祖師の彫像や絵画の制作）
3. 遊行上人には絶対的に従えとする戒律。（知識帰命）
 - ① 知識（遊行上人）は阿弥陀仏の使者であり、同時に代理でもある。
 - ② 時衆は身体や命を知識に任せ、絶対服従して修行に励むべきである。
 - ③ 知識は、教団の制戒に背き、かつ回心（えしん、反省して悔い改める）しない時衆を「不往生」として、極楽往生を取り消す絶対的な力を持つ。
 - ④ 時衆教団に入る時には、知識に従い、戒律を守る誓約をし、鉦を打つ。

●二祖真教の遊行と当麻に無量光寺建立

真教は、41 歳で一遍に出会ってから、13 年間一遍の遊行に随伴し、1289（正応 2）年一遍が示寂すると 53 歳で一遍から遊行上人を引き継いだ。それから 16 年間、主に北陸を中心に遊行の旅を続け、1304（嘉元 2）年遊行 3 代を智得に譲り、当麻（相模原市）に無量光寺を建立し*独住した。*遊行をやめて一所に住むこと、隠居寺。

真教は 1319（元応元）年、無量光寺で没した。83 歳であった。

5. 遊行 4 代吞海上人と清浄光寺（しょうじょうこうじ）の創立

吞海上人：1265（文永 2）年～1327（嘉暦 2）年、享年 63 歳。

3 代智得が当麻（現相模原市）無量光寺に独住（隠居）した 1319（元応元）年、吞海は 4 代目遊行上人に就任した。

吞海の生まれた俣野家は太田一族の支流で、鎌倉幕府の御家人である。実兄は俣野五郎景平といい俣野荘（今日の横浜市泉区～藤沢市の東部）の地頭であった。

出家は 1295（永仁 3）年 31 歳。出家の原因は定かではないが、鎌倉大地震から 2 年後のことなので、天災における人間の危うさ無力さを痛感し、世の無常を感じた結果、兄景平のすすめによって二祖真教の弟子として、時衆教団に入門したものである。以後、真教に随従して回国の旅を続けたようである。1301 年（正安 3）京七条仏師康弁（運慶の三男）が土地を寄進すると真教は吞海に命

じて道場を創建せしめた。それが金光寺であり、呑海は開山第一世となった。

1319（元応元）年4月6日、因幡国味野（鳥取市）西光寺で遊行4代を相続した呑海は、味野を起点に7年に及ぶ遊行回国の旅を続けた。1320年は3代智得がわずか独住1年にして無量光寺にて亡くなった。しかし呑海はこの時遊行上人になってまだ1年しか経っていなかったもので、独住（隠居）のため無量光寺へ帰住することなく、無量光寺は内阿（うちあ）真光に任せた。

1325（正中2）年1月11日、呑海は武蔵国芝生宿（横浜市西区浅間町）において、安国に遊行5代を譲り、自らは無量光寺に独住しようとしたところ、幕府の有力者（北条氏一族の大仏氏らしい）を後ろ盾にした真光の策謀によってそれを阻まれた。

やむなく呑海は実家の俣野（藤沢市）に帰住した。そこで兄俣野五郎景平は弟のために藤沢道場を建設した（開基）。それが清浄光院（のちの清浄光寺）であり、開山は呑海であった。以後代々同寺は独住の寺となり、その住持は藤沢上人と呼ばれた。

1327（嘉暦2）年、呑海は清浄光院にて入滅、享年63歳であった。

【 結 び 】

一遍は生涯自分が新しい宗派を開いたという意識は持っていなかった。教団としての確立を図ったのは二祖真教であった。そのため時宗にあつては、他宗と違って二祖の存在が特別に大きいのである。

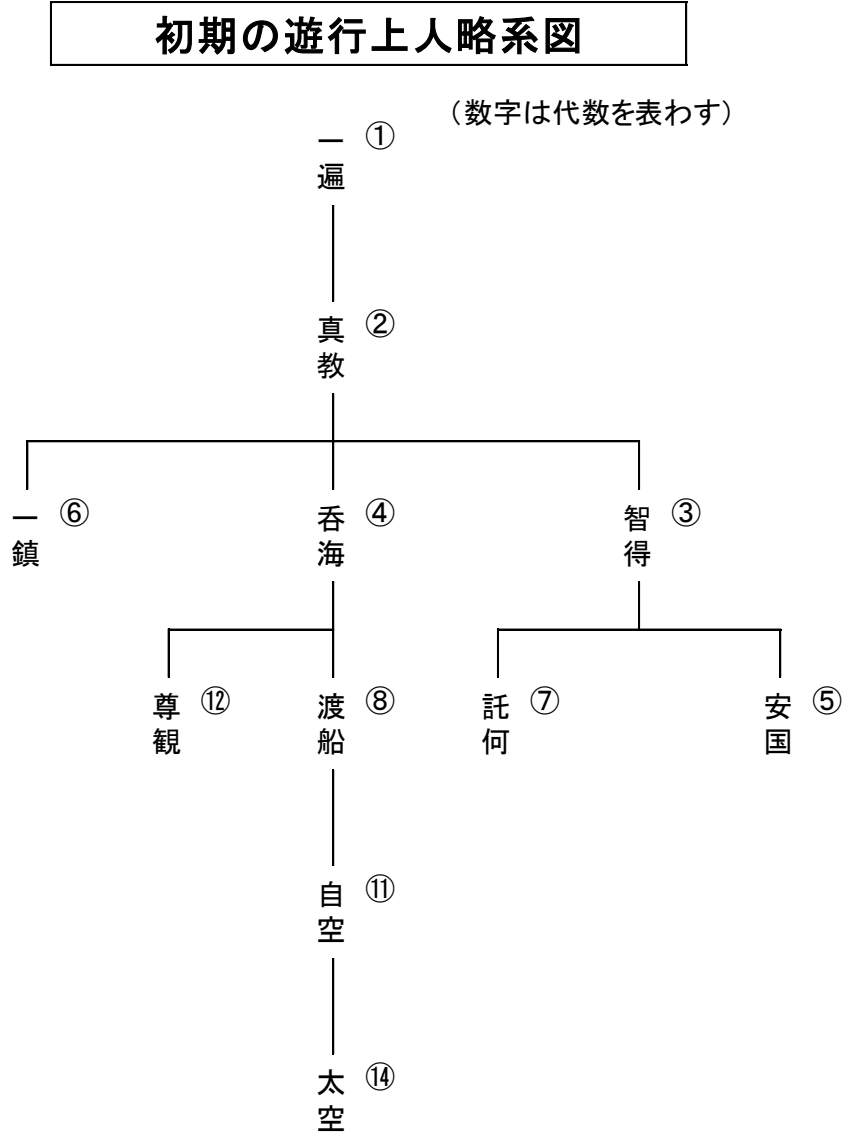
時衆の特色は、その第一が遊行上人の回国遊行であり、第二、踊り念仏が易行であったので、庶民に受け入れられたこと。第三が念仏札を配る賦算であった。

また鎌倉時代末期から南北朝・室町時代には、社会が不安定化し、日本中の各地で戦乱が巻き起こった。時衆僧侶は戦場へ赴き、敵・味方の区別なく、臨終の武士に「南無阿弥陀仏」と10度となえた（十念）。となえられた武士は極楽往生できると、安心して死ねたのである。そうした陣僧の存在が、武士からの支持を広げた。

また、猿樂・田楽から能を大成した「観阿弥」「世阿弥」や、室町幕府8代将軍足利義政が建てた慈照寺（銀閣）の庭園を造園した善阿弥など「阿弥号」を名乗る人たちも時衆であったという。

今日藤沢市民一般に、「遊行寺」の名称で親しまれているが、正式名称は「藤沢山（とうたくさん）無量光院清浄光寺」である。

資料 1. 初期の遊行上人略系図



資料2. 初期時衆教団略年表

初期時衆教団略年表		
西 暦	年 号	事 項
1237	嘉禎3	真教、生まれる
1239	延応元	一遍、伊予で生まれる。
1271	文永8	一遍、善光寺に参詣。「二河白道図」を目にする。
1274	文永11	一遍、熊野参詣。時宗の立教開宗。
1276	建治2	一遍と真教豊後府中で出会う。一遍39歳、真教41歳。
1279	弘安2	信州佐久で踊り念仏を始める。
1289	正応2	一遍、兵庫観音堂で没する。51歳。 真教、賦算を始める。
1299	正安元	《一遍聖絵》制作
1302	正安4	真教、兵庫観音堂で別時念仏と一遍の13回忌を修する。 京都七条仏所が真教に土地を寄進。金光寺建立。
1303	嘉元元	真教当麻道場にて歳末別時念仏を修する。
1304	嘉元2	真教、無量光寺に独住。遊行3代を智得に譲る。
1306	嘉元4	真教「道場誓文」を表わす。 真教、「遊行上人縁起絵」を熊野本宮に奉納。
1307	徳治2	《遊行上人縁起絵》金蓮寺本の祖本成立か。
1318	文保2	国府津の蓮台寺《真教上人坐像》造像。真教82歳。
1319	文保3	真教、無量光寺で没する
1319	元応元	3代智得、無量光寺に独住。→遊行4代吞海。
1323	元亨3	《遊行上人縁起絵》真光寺本（奥書）
1325	正中2	清浄光寺建立。4代吞海が独住。→遊行5代安国。
1327	嘉暦2	5代安国、清浄光寺に独住。→遊行6代一鎮。
1333	元弘3	鎌倉幕府滅びる。
1337	延元2	6代一鎮、清浄光寺に独住。→遊行7代託何。

《 引 用 参 考 文 献 》

- ・本稿の絵画・写真は清浄光寺（遊行寺）の許可を受けたものを掲載。
- ・「国宝 一遍聖絵」 編集神奈川県立歴史博物館
発行 遊行寺宝物館
- ・「一遍聖絵を歩く」 小野正敏 他 高志書院
- ・絵で見る「一遍聖人伝」 長島尚道 ありな書房
- ・「一遍聖」 大橋俊雄 講談社学術文庫
- ・「一遍上人と遊行寺」 寺沼琢明 ぎょうせい
- ・特別展「真教と寺衆」―時宗二祖上人七百年御遠忌記念―
編集 遊行寺宝物館・神奈川県立歴史博物館
発行 時宗総本山清浄光寺
- ・「藤沢と遊行寺」 高野修 発行藤沢市文書館
- ・「浄土宗・時宗」 伊藤唯真 小学館
- ・「仏教大辞典」 古田紹欽 小学館
- ・別冊歴史読本「日本『神社』総覧」 新人物往来社

尾日向邸を訪ねて

2019 年 11 月 12 日

刀根 恵子（会員）

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ 輪 が三つ

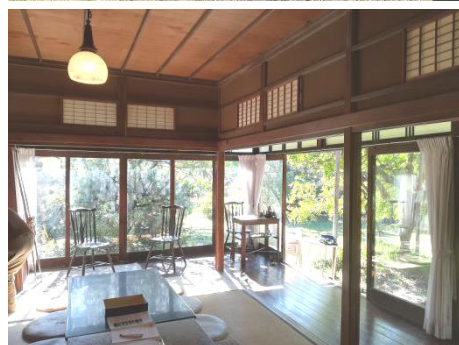
ミツワ ミツワ ♪

こんなテレビ CM ソングが、未だに記憶に残っている。ミツワ石鹸の CM で尾日向竹重が興した三ツ輪産業とは直接関係ないが、「ミツワ」ということで尾日向邸を訪れたとき、ふと思い出した。

今日は歴史散歩ということで、会員外の方も含め 23 名が参加。鵜沼公民館で待ち合わせ出発。

さて、門を入ると古い日本家屋が、と思いきやオシャレな玄関ドア。小径を右に曲がると突然広い庭が姿を現す。今の家屋には見ることでできない縁側より入る。十畳の和室で現在の主でいらっしゃるお孫さんの尾日向梨沙さんにお話を伺う。柱、床の間など本格的な造りで映画などの古い邸宅のワンシーンをしているよう。床の間の掛け軸には、ご家族が書かれたと思われる書などもあり、今にもお姿を現すのではと思わせるような当時の息づかいを感じた。広縁の大きなガラス戸についている懐かしい錠。そこから見える静かなゆったりしたお庭、現在 700 坪の敷地とのこと。

ここに咲く樹々、花々は多くの種類があり珍しい植物など、大きなガラス越しに四季の移ろいが楽しめたのだろう。桜、紫陽花、サルスベリ、柿、ミカン……など、色、



香りが次々に楽しめる。花好きな私としては懐かしくもあり、心躍る縁側だった。

次に廊下を抜けると洋間に通じる。何の違和感もなく繋がっている。廊下の壁面、洋間の壁面に様々な大きさ、形の棚が備えつけられていて興味深かった。またテーブル、ルームライトなどアールデコ



心地よい和室で尾日向梨沙さんの話に耳を傾ける調の美しい形、色で整えられていた。私にとってはテーブルに興味をそそられた。暖炉、置物など、来客の多い社長の応接間として重厚な空間だった。

昭和3年に建築され、同23年から尾日向邸として90年を経た現在も味わい深い佇まいを見せている。

オーナーのお話に私ごとではあるが、いちいち頷けるのである。国の登録有形文化財となった尾日向邸と我が家とは雲泥の差ではあるが、管理・維持という点では同じだからだ。植物一草、木造家屋の湿気対策など日々直面する問題は限らない。すばらしいと眺めることと維持していくことには大きなギャップがある。しかし、前向きにお孫さんが文化財として受け入れた今、四苦八苦しながらも進んでいる。そこにはご家族との交わりがそこに息づいていて、時に思い起こされることがあるから、残せるものなら残しておきたいとの思いではないだろうか。ある学校の建て替えの時に、子ども達は大きな音とともに壊されていく自分達の教室を見て、絶叫し、涙を流したことをふと思い出した。

オーナーは仕事との両立を考えながら維持方法を模索されている。大変なことだと思う。文化財ということでボランティアの定期的清掃に加え、由緒ある敷地、建物だからこそできるイベントを考え、心の内では維持費の捻出を考えつつ、日々自分のお仕事との両立をされている。

＊

さて、11月23日、イベントに参加すべくあの和室に再び足を踏み入れた。それは、琴と紙芝居による平家物語の世界だ。和風の紙芝居で、多くの素材を組み合わせさせて貼った臨場感あふれる画面と語り、バックの琴の演奏で私達を平家物語の世界に引き込む。三者の織りなす素敵なタイムスリップ。それはあの和室だから一層盛り上がったのだろう。

（とね けいこ）

鵜沼の登録有形文化財

岡田 哲明（会員）

登録有形文化財制度とは

昭和 24（1949）年 1 月 26 日、法隆寺金堂が壁画模写中の失火により損焼したことはご存じの方も多いと思う。失火原因は一説には電気座布団の電源の切り忘れともいわれるが、定かではない。

これが契機となって翌 25（1950）年に、それまでの「国宝保存法」「史蹟名勝天然記念物保存法」「重要美術品等の保存に関する法律」をまとめて、あらたに「文化財保護法」が制定され、後世に伝えるべき文化財を重要文化財として指定し、それを維持、保存する制度が発足した。

「文化財保護法」の対象は建造物と美術工芸品に 2 分されるが、いずれも有形のものが対象である。建造物は、建築物と橋梁などの土木建造物。美術工芸品は、絵画、彫刻、工芸品、書跡典籍、古文書、考古資料、歴史資料の 7 分野について指定される。

そのうち国が特に貴重と認めたものが国宝に指定されるのである。従って国宝は重要文化財の範疇に入る。

一方、都道府県や市町村が「文化財保護条例」を作って指定する有形文化財があって、ややこしいが、その場合は「〇〇県指定有形文化財」というように表記して、国の指定と区別するのが一般である。

戦後の急激な都市化などにより近世末期や近代以降の多種多様な建造物が、建築史的、文化的意義や価値が十分認識されないまま破壊される例が相次いだ。このような反省から昭和 40（1965）年頃から近世の民家や近代の洋風建築などが国の重要文化財や都道府県や市町村の有形文化財に指定される例がふえていった。

しかし、急速に消滅する近代建造物の保護には、国レベルで重要なものを厳選する制度のみでは不十分であり、より緩やかな規制の下で幅広く保護の網をかけることの必要性が議論され、重要文化財制度を補うものとして平成 8（1996）年の文化財保護法改正により、従来の「指定制度」に加えて新たに「登録制度」が導入された。これにより、その所有者が国に登録申請し、審査を通ったものが登録有形文化財として登録されるようになった。

では、どのような文化財が登録に値するのか。平成 8（1996）年の法改正では対象は建築物に限られていた。この理由は、都市化や開発の進展、生活居住形態の変化などにより取り壊される可能性が大であり、早急に保護措置が必要であったからである。

文化財保護法は平成 16（2004）年にも法改正があり建造物以外の有形文化財も登録対象となることになった。



登録有形文化財の証票

「この建造物は貴重な国民的財産です」
と書かれている

登録有形文化財はどのくらいあるか

登録有形文化財の総数は 2019 年 4 月 1 日現在、全国で 12,121 件ある。建造物の分野では、公共建築、教育施設、軍隊関連施設、伝統産業施設、商業施設、産業関連施設、交通関係施設、宗教建築、個人住宅などである。

神奈川県には 242 件あり、うち藤沢市には 31 件の登録有形文化財があるが、その中の 10 件は清浄光寺（遊行寺）の建築である。

鵜沼の登録有形文化財

ここでいう鵜沼の登録有形文化財とは、鵜沼に今、現存する 4 件（うち 1 件は辻堂東海岸から移設されたもの）と、もと鵜沼にあつて今は他（太平台）に移設されているもの 3 件をいうことにする。以下、登録順に示す。

- 1) 旧近藤邸……………2002 年 8 月 21 日登録
- 2) 旧後藤医院鵜沼分院……………2010 年 9 月 10 日登録
- 3) 林家住宅主屋……………2014 年 10 月 7 日登録
- 4) 月山堂滴水庵主屋……………2016 年 2 月 25 日登録
- 5) 月山堂滴水庵待合 〃
- 6) 月山堂滴水庵大門 〃
- 7) 尾日向家住宅洋館・和館…2018 年 3 月 27 日登録

このうち、辻堂東海岸から移設されたものとは 1) 旧近藤邸であり、もと鵜沼にあつて今は他（太平台）に移設されているもの 3 件とは 4) 5) 6) 月山堂滴水庵の諸建築である。

1) 旧近藤邸（藤沢市鵠沼東 8-1：藤沢市民会館の敷地内）

建物用途：個人住宅（別荘）

構造規模：木造 2 階建 延 173.39 m²

建築年代：大正 14（1925）年、昭和 56（1981）年移設

設計者：遠藤 新

この建物は当初、辻堂東海岸に近藤憲二（1874～1948）の別荘として建てられた。近藤憲二は東洋麻糸紡績、真崎大和鉛筆（三菱鉛筆の前身）、朝日スレート、日本カーボンなどの社長を歴任した実業家で横浜商工会議所の常議員を務めた。

憲二没後、所有者が変わり老朽化が進んで取り壊しが決定されたが、近隣住民や建築家が保存運動「旧近藤邸を守る会」を立上げ 1 年余の運動の結果 1981 年 3 月藤沢市によって市民会館前に移築保存され市の所有となった。

設計者：遠藤新（1889～1951）は大正 6（1917）年、東大建築科を卒業して帝国ホテル設計のため来日していたフランク・ロイド・ライトの設計事務所に勤めた。ライトに心酔し、ライト調の建築を数多く設計している。

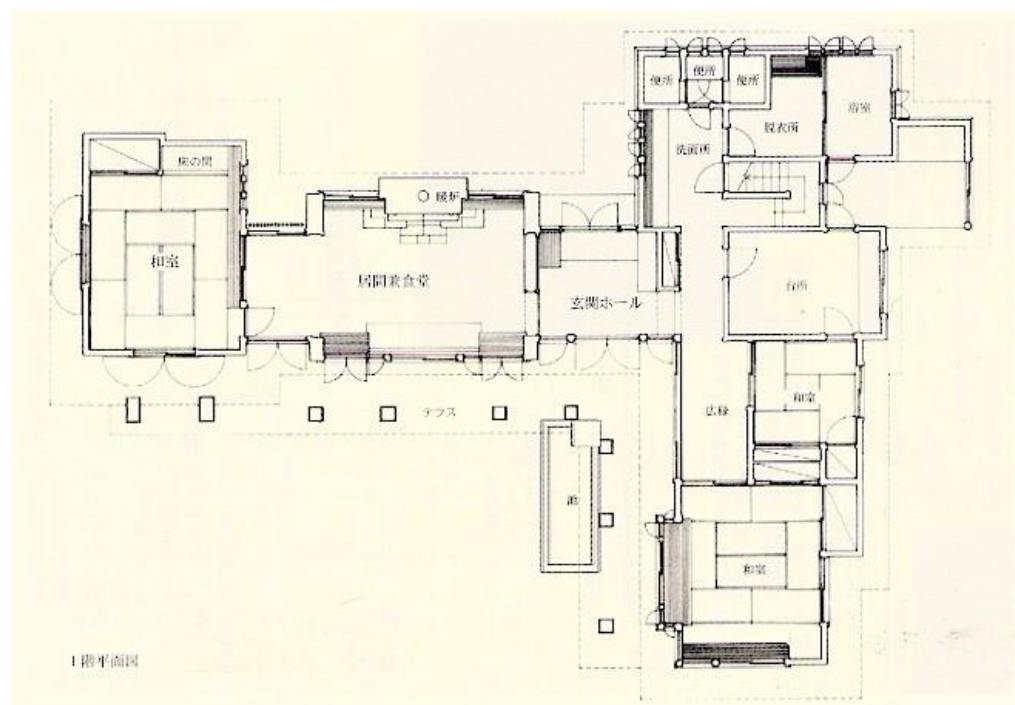
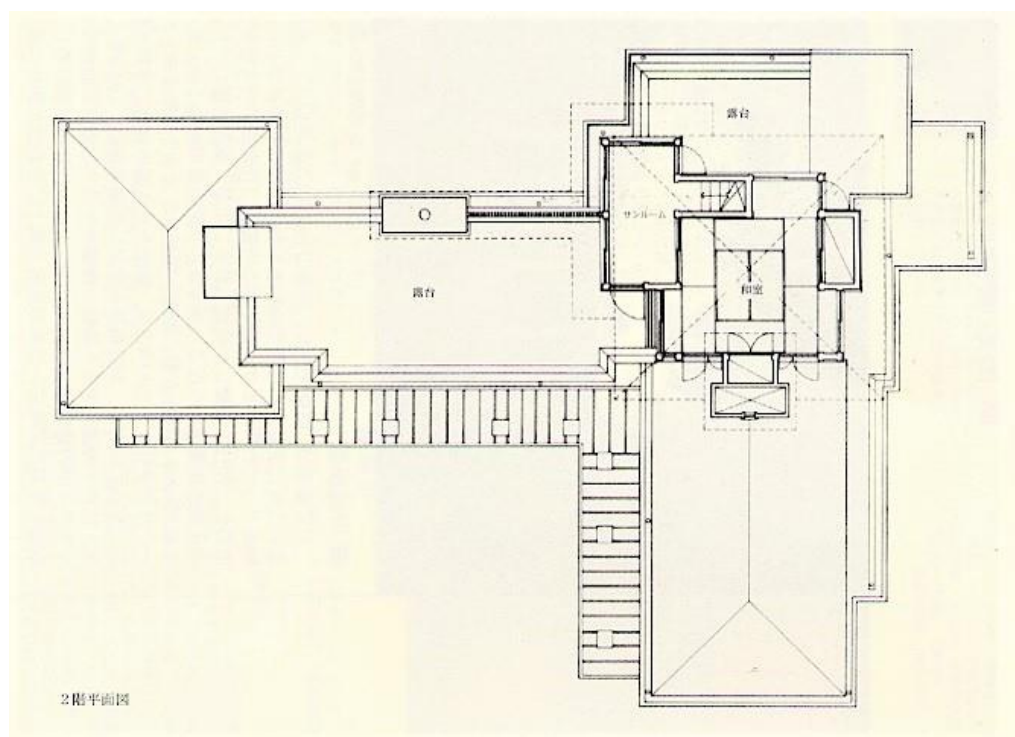
彼が設計した作品には自由学園明日館、同目白講堂など重要文化財 3 件、登録有形文化財 7 件、東京都選定歴史的建造物 1 件、姫路市都市景観重要建物 1 件などがある。



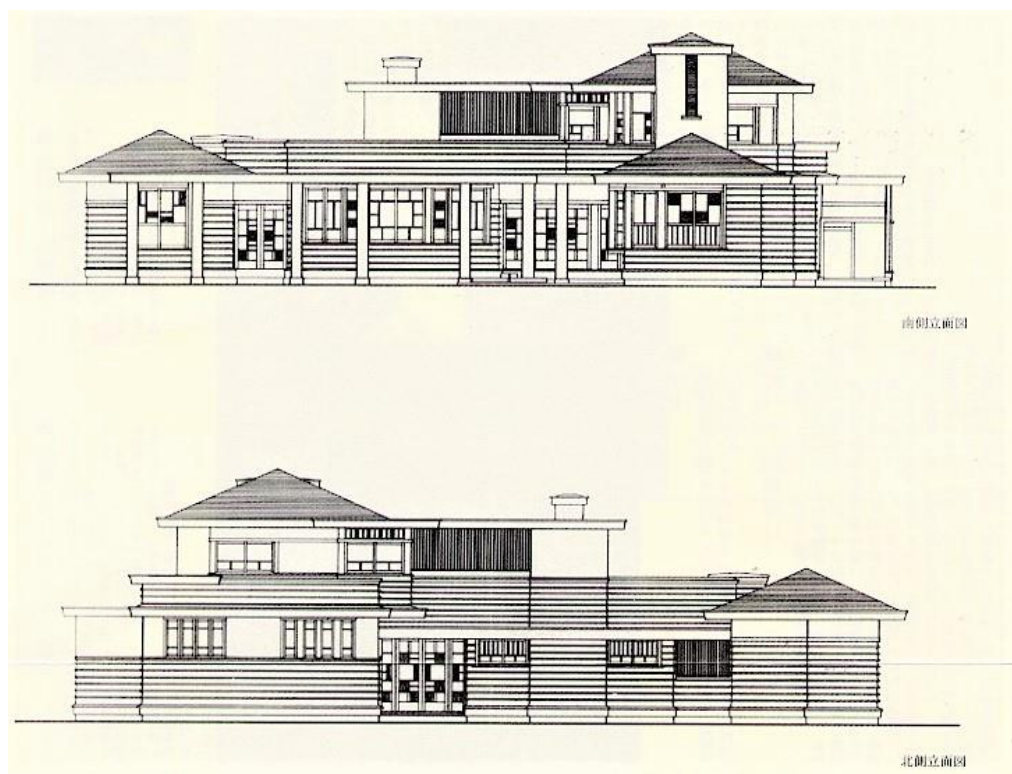
遠藤 新



なお 4 月 26 日から邸内に障害者就労支援施設「軽食と喫茶 すかいは一と」がオープン（9:00～17:00 月曜休み）した。



旧近藤邸 1・2階平面図



旧近藤邸立面図

□ 建築概要

建物名-旧近藤邸

所在-元・神奈川県藤沢市辻堂東海岸3-4

現・神奈川県藤沢市鶴沼東8番1号

施主-近藤賢二(当時、朝日石綿工業社長)

現所有者/藤沢市

設計-遠藤 新(えんどう・あらた)

施工-女良正吉建築事務所(1925年)

移築工事-鹿島建設(1981年)

構造規模-木造2階建

面積

敷地面積-約3000坪(元所在地)

延床面積-173.39㎡

(1階146.06㎡ 2階27.33㎡)

主な外部仕様

屋根-栗こば葺(軒裏一部しっくい塗)

移築後はコロニアル

壁-下見板張(一部しっくい塗)

建具-木製建具

主な内部仕上

天井-全室/しっくい塗

壁-全室/しっくい塗

床-板張/(和室/畳)

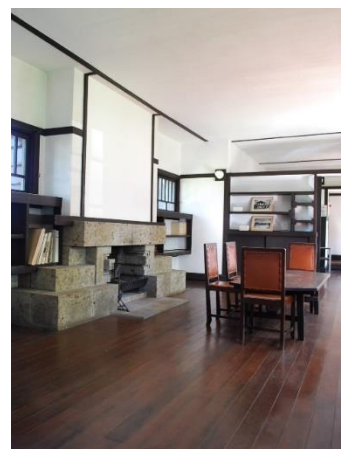
設備

暖炉-暖房/大谷石積(居間)

資料 「住宅建築」1981年10月号より



外観



内部

2) 旧後藤医院（藤沢市鵠沼橋 1-14-7）

建物用途：医院

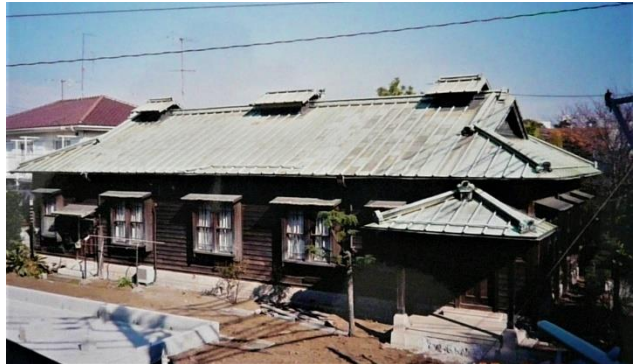
構造規模：木造平屋 168.8 m² (51 坪)

建築年代：昭和 8（1933）年

設計者：不詳

この建物は東京小石川駕籠町 113 番地で後藤胃腸内科医院を開いていた 後藤 瞭平（1868～1961）が昭和 8 年に建築開院したものである。後藤瞭平は群馬県吾妻郡高山村の出身である。長男秀兵（1888～1971）は東大医学部卒業後、同医院に医師として従事していた。分院の建設時、秀兵は 45 歳だから独立の契機だったとおもわれる。以降、分院として戦後も開院していたが、高齢に伴い閉院された。秀兵は終生独身で、医院内に居住していたから併用住宅ともいえる。

設計者は判らないが入母屋、銅板瓦棒葺き屋根といった和風の要素と上下の出窓、外壁の横下見板張りなど洋風の要素が混在する。また、上下窓は 2 重窓になっており、床高を非常に高くって床下換気が図られるなど環境面の配慮がみられる。内部は中廊下を挟んで 6 室整然と配置されている。



補修前の後藤医院鵠沼分院の全景



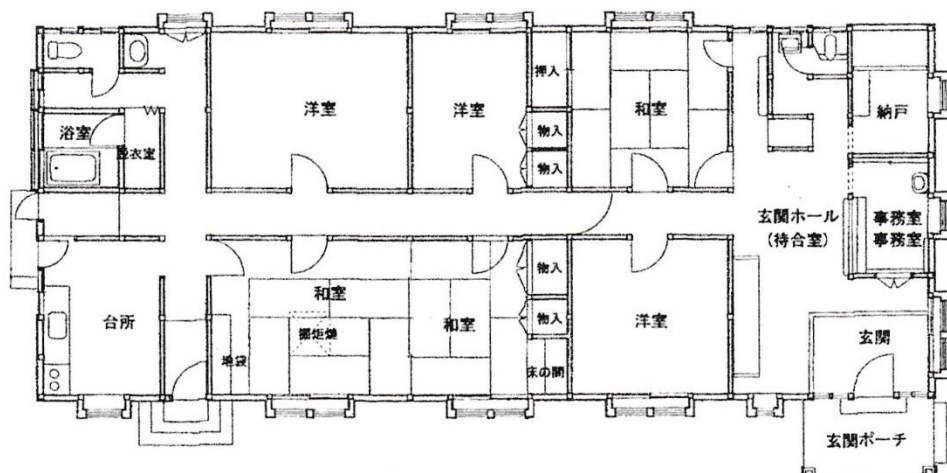
「鵠沼橋市民の家」入り口側

平成 20（2008）年、藤沢市はこれを借り受け、補修をして「橋市民の家」として活用を図った。

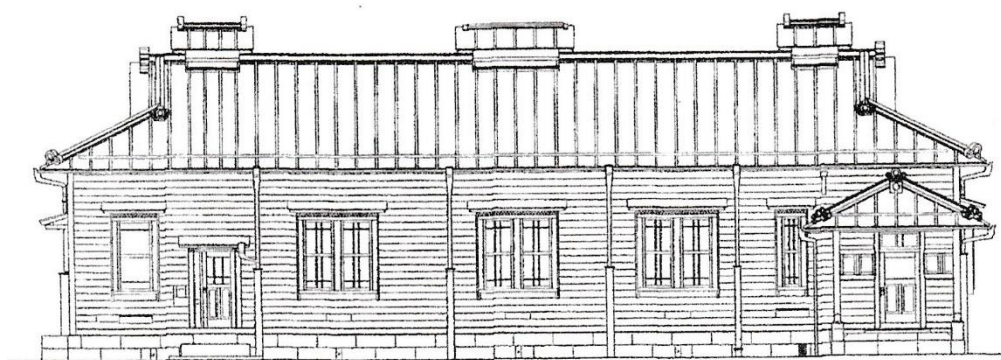
現在は市の所有となり、市民に利用されている。

平成 22（2010）年、登録有形文化財となる。

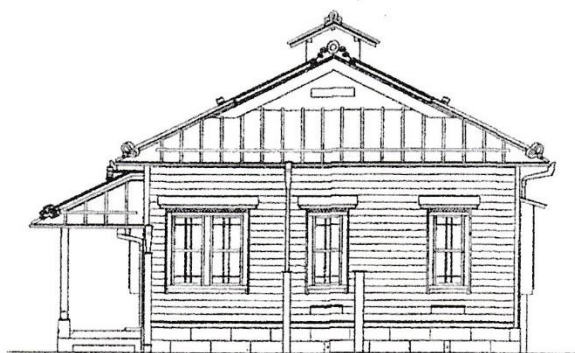
◆ 後藤分院は『鵠沼』93 号に詳細記事があるので参照されたい。



平面図



南立面図



東立面図

製図：関東学院大学水沼研究室



妻側外観



内部

3) 林家住宅母屋（藤沢市鵠沼桜が岡 2-1-26）

建物用途：住宅

構造規模：木造、一部 2 階建て、小屋裏書庫

建築年代：昭和 12（1937）年、昭和 33 年増築

設計者：林達夫

この建物は平凡社『世界大百科事典』の編集長なども務めた著名な評論家・思想家であった林達夫の自邸である。

林は藤沢市六会にあった古民家を買ひ、その古材を生かしながら「古英国風田舎家」に造ったもので、内部は古民家の太い梁などの部材を見せつつ、随所にイギリス風の意匠を取り入れている。外観は急勾配の切妻屋根とハーフティンバーの外壁が特徴的である。

林は昭和 13（1938）年の婦人公論 5 月号に「私の家」と題してこの自邸を紹介して以下のように述べている。



林 達夫

私は古い農家の一つを手に入れて、その元のままの構成と古い巨材の「味」とを利用してこれをオールドイングリッシュに改装してみることを試みた。これには既に多少の先例がなくはないが、私はそんな場合殆どみんなが陥っている「趣味本位」と「装飾過剰」とを極力排して、簡素と平凡とを旨とした。日本古農家と古英国風田舎家との間には人が想像する以上の共通性があるのである。

この住宅は素人の私が西洋建築にまるで無知な凡庸な田舎大工を使って、全く専門家の協力を仰がずに独力で設計監督したという点でも一つの実験であった。

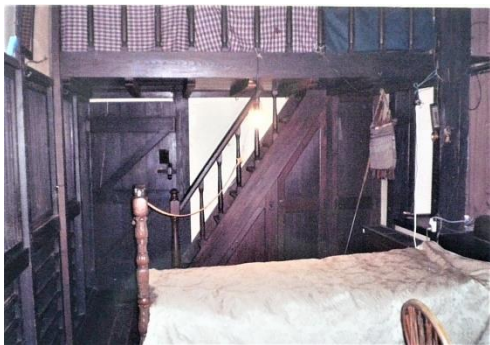
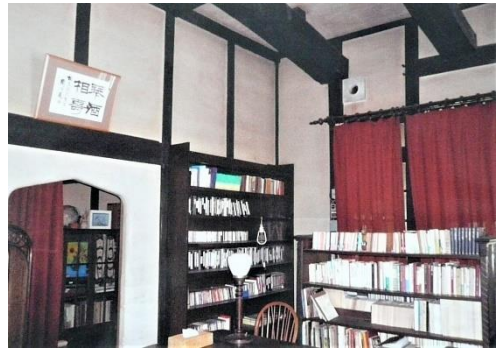
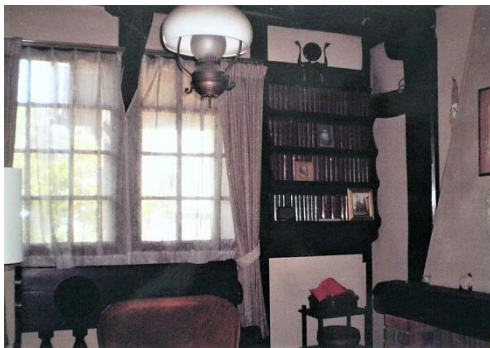


竣工当時の林邸（婦人公論 1938 年 5 月号）

◆ 林邸は『鵠沼』83 号、101 号に詳細記事があるので参照されたい。



正面外観



内部

4) 月山堂滴水庵 主屋 (藤沢市辻堂大平台 1-10-25 高橋方)

建物用途：座敷・茶室

構造規模：木造平屋建 72.3 m² 方形瓦葺周辺軒銅板平板葺

建築年代：明治後期 昭和 23 年頃解体 昭和 35 年頃当所に移築

設計者：不詳

5) 月山堂滴水庵 待合 (同上)

建物用途：待合

構造規模：木造平屋 約 1.2 m² 銅板葺き

建築年代：昭和 35 年頃当所に移築

6) 月山堂滴水庵 大門 (同上)

工作物：門 (屋根付き)

構造規模：木造平屋 間口 2.5 間 切妻屋根瓦葺一部銅板葺

建築年代：昭和 35 年頃当所に移築

沿革

滴水庵の施主である高橋繁氏は表具師で、鵠沼の別荘の顧客が多かったことから、鵠沼海岸商店街に支店「月山堂」を開業しました。滴水庵は繁氏が趣味で営んだ別荘です。



母屋の建物は、三井財閥の益田孝(鈍翁)が鵠沼の別荘に建てたもので「紫明庵」と号していました。文献によると、山縣有朋や桂太郎などが鈍翁に招待されて訪れています。実業家の高橋義雄(箒庵)も鵠沼別荘を訪れた時のことを著書に記しています。鈍翁の鵠沼別荘は、著名な小田原の掃雲台(明治 39 年)よりも早く造られました。

益田孝(鈍翁) 鈍翁没後、土地が売却される際に、近くに別荘を構え、表具の仕事を通じて懇意にしていた王子製紙社長の高島菊次郎氏の仲介により、建物を譲り受けました。

滴水庵主屋は、益田家から譲り受けたあと 10 年近く解体した材の状態で保管されていて昭和 35 年頃、現在地に移築されました。移築の仲介をした高島菊次郎氏により「滴水庵」と命名され現在に至ります。(藤沢市ホームページより)

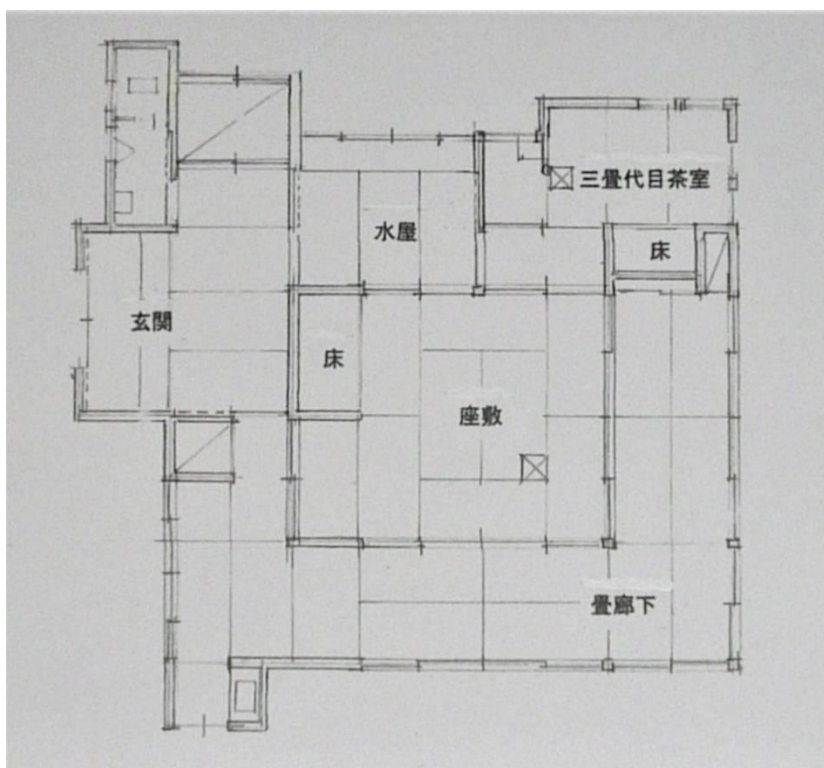
＊

11 月 9 日、秋の辻堂を楽しむ会実行委員会主催「藤沢の有形文化財・滴水庵を散策しましょう」という催しがあつて、筆者は滴水庵を見学する機会を得た。

その案内パンフレットには、『主屋の建物はもともと京都にあった「紫明庵」を大正初期に益田孝が鵜沼の別荘地に移築したものです。伊藤博文、山縣有朋、桂太郎も訪れたという紫明庵は、表具師の高橋繁氏が譲受け、その後大平台に移築し「滴水庵」と命名されました』とあって市のホームページの内容と少しニュアンスが違っている。

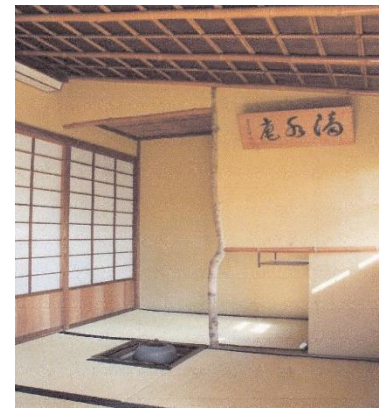
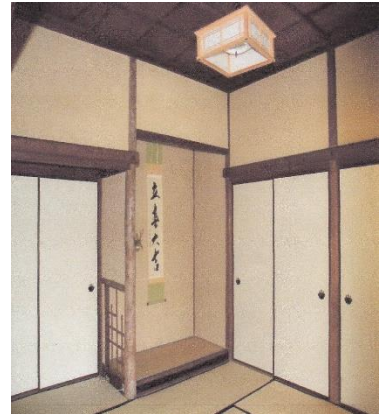
滴水庵のある高橋家庭園は広大で起伏に富み、池を巡る回遊式庭園である。当該文化財のほか、もう一つの待合、茶室、三重塔、稲荷社、雪隠、裏門などがあり、いづれもなかなかの建物である。庭園の中ほどには、150 坪はあろうかという天然の湧水を湛えた池があり鯉がゆったりと泳いでいる。「滴水庵」は、ここからの命名であろうと思われた。

なお、鵜沼にあった益田別荘の場所は鵜沼下岡 6664 番地（現：鵜沼松が岡 3-22・27）敷地の広さは 3723 坪であった。鈍翁没（昭和 13 年）後、所有者の変遷があったようだが昭和 29 年には第一物産の所有となり昭和 31 年に 36 区画の分譲宅地として三井不動産の仲介により販売された。ちなみに 1 区画 90 坪前後、平均坪単価は 9000 円であった。

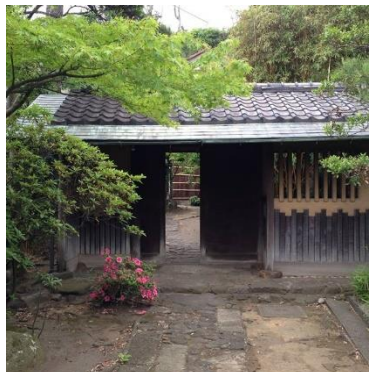
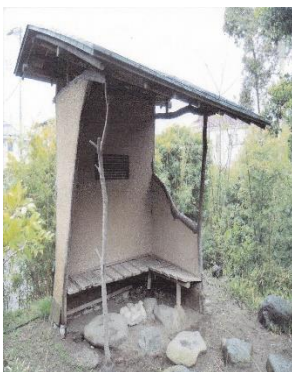


主屋平面図

製図：筆者



主屋：座敷・茶室



左から

待合：大門：三重塔

7) 尾日向家住宅 洋館・和館（藤沢市鵜沼松が岡 1-6-31）

建物用途：住宅

構造規模：木造平屋一部 2 階建て 建物登録面積 224 m²

建築年代：昭和 3（1928）年頃、同 40 年、60 年に増築

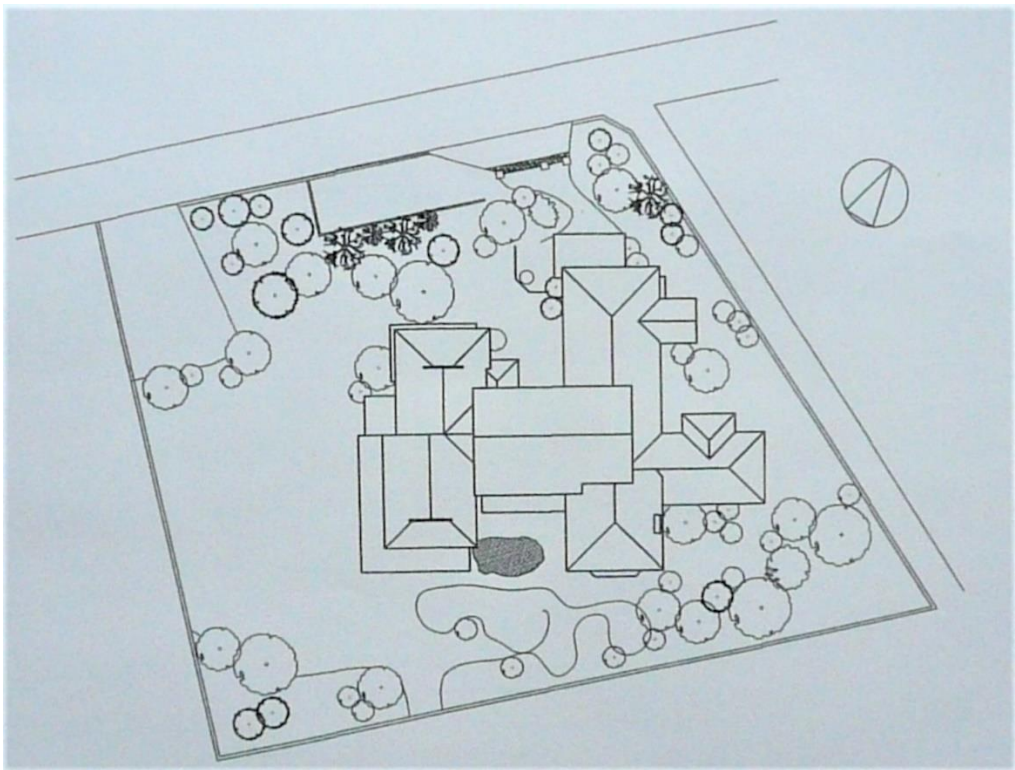
設計者：不詳

尾日向家住宅は尾日向竹重が昭和 23 年に居住用に購入した建物である。

尾日向竹重（1902～1990）は長野県南安曇郡堀金村出身、専修大卒後大正 15（1924）年、三鱗石炭株式会社入社、昭和 15（1940）年、三ツ輪産業株式会社を創立。以後かかずの石炭石油関連の会社創立に関与し、商工省物価諮問委員、石油審議会専門委員、日本練炭工業会会長を歴任、業界発展に盡力した。



尾日向竹重

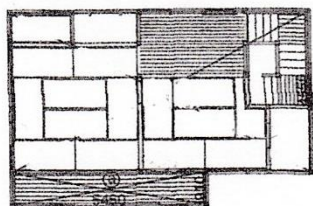


配置図・屋根伏図

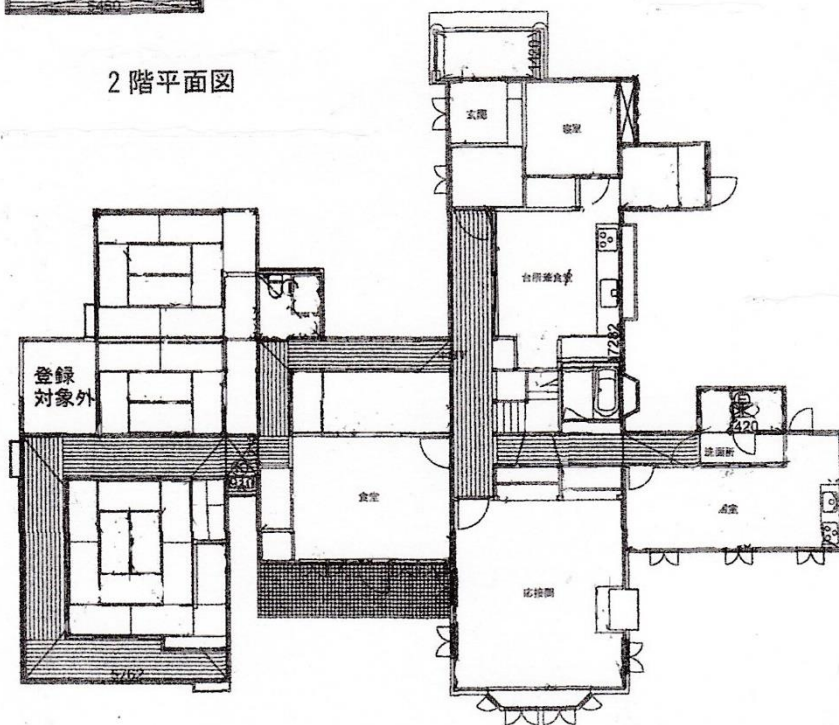
製図：関東学院大学水沼研究室



立面図



2 階平面図



1 階平面図

製図：関東学院大学水沼研究室



外部



内部

中段左：食堂

右：座敷

下段左：応接室

中：同暖炉

右：同照明

おわりに

2019年11月12日、鵠沼を語る会では尾日向邸の見学会を行なった。尾日向邸は以前、鵠沼を語る会の有志で一度、見せて頂いたことがある。それは2002年の秋で、NHKが尾日向邸をロケ地に使って岸田劉生を扱ったテレビ番組を放送した頃であったと思う。その尾日向邸が登録有形文化財となり鵠沼文化を後世に伝える役目を担って下さることは喜ばしいことだし、それを決断された尾日向家の方々の高い志に頭が下がると同時に図面の公開も許可して下さったのである。

会誌『鵠沼』では以前「鵠沼の歴史的建築物を訪ねて」というシリーズを掲載していた。そのシリーズの一環として、本文中でも紹介してあるが、後藤分院は2002年の秋、林邸は2006年の秋にそれぞれ見せて頂いて紹介してきたいきさつがある。以上の3物件が登録有形文化財になったことで、この際、鵠沼地区の登録有形文化財の現状を纏めてみようと思ったのである。

今回、月山堂滴水庵を取り上げたのは、鵠沼にあった建物が移築とはいえ現存していた事実に感銘を受けたからであった。月山堂高橋氏の見識に、敬意と感謝を禁じ得ない。

滴水庵の待合と大門も、今回取り上げたが、この二つも益田別荘にあったものか、または、それ以外の場所から移築されたものか、実は確認が取れていない。

また登録有形文化財ではないが、滴水庵の庭には三重塔が建っている。江戸時代後期のものと思われるが、どこから移築されたものか、これも興味を抱かせる。

高橋氏に面会して、詳細をお伺いする機会を得たいと思っている。筆者は『鵠沼』116号に「浮世絵に見る江の島三重塔」を書いた。その文末で杉山検校が建てて今は無き江の島三重塔の再建を願った。

「滴水庵の三重塔が江の島に移築されたらいいのでは…」とってしまうのである。
(おかだ てつあき)

参考引用文献・インターネット

藤沢市ホームページ

WIKIPEDIA

旧後藤医院建物調査報告書 鵠沼の緑と景観を守る会

鵠沼 83号 93号 101号 鵠沼を語る会

秋の辻堂を楽しむ会パンフレット 秋の辻堂を楽しむ会実行委員会

「村娘座像」後日譚

『鵠沼』117号に岸田劉生画「村娘座像」が昨秋オークションに出され1億8千万円で落札されたことを書いたので1冊を「村娘」お松さんの甥、葉山勝則さんに贈呈したところ「この絵は『週刊朝日』昭和36年5月12日号の表紙になったものです」との返信を頂いた。

表紙は顔の部分だけなので私は2枚目に描かれた「胸像」のほうと思っていたので比べてみると、顎と肩の位置など、やはり葉山さんのいうとおりであった。



「村娘座像」



2枚目の「胸像」



この表紙

を見たお松さんの娘さんが週刊朝日に投書したのがきっかけで、モデルの所在が判明し、劉生の娘・麗子との再会が叶ったという記事が同誌の9月15日号に掲載され、更には、お松さんと「鵠沼を語る会」との交流にも繋がっていったのだった。「村娘座像」は当会にとっても縁の深い作品といえるだろう。(T.O)

鵠沼と松林

私は去年「鵠沼を語る会」に入会した。

「鵠沼を語る会」の例会は毎月第2火曜日に開かれている。例会は鵠沼公民館の第1談話室で開かれているが、ここは見晴らしがいい。そこで最初に感じたのは、昔の鵠沼には松が多かったなという事である。今では住宅が密集しているが、旧東屋料亭の庭には松があったし、佐々木パーキングのところは高い松林があった。また、旧中屋旅館の跡地もかなりの松林が見られたものである。現在、公民館の

コーヒースレイク Coffee Break コーヒースレイク Coffee Break コーヒースレイク

周囲には高い松が数本見られるが、こうした松の林があちこちに見られたのが鵠沼であった。

私の中学校は、創立間もない湘洋中学校であった。自宅は旧東屋の中にある。通学は松林の中を行くという感じであった。老人ホーム「オーシャンプロムナード」



湘洋中学校へ道は続く むかしの日の出橋辺り

前には小川が流れており、それに沿って大きな屋敷の松が覆いかぶさるように植わっていた。日の出橋を渡ると松林が広がり、そこに一本道が通っていた。なかなかの風景でこの松林を絵に描く人を多く見かけた。

特に海岸沿いの家々は松林に隠れるように建っていたように思う。初夏に雨が降ると水たまりには松の黄色い花粉がたまった。春先の風の強い日は松林がうねり、松風を聞くことができた。今では黄色い水たまりも見かけることもなく、松風も聞くことはない。開発が進み松を切ってしまったからである。

そもそも昔の鵠沼周辺は砂丘と沼地であり、先人たちが湘南の気候に目をつけ人が住めるように松を植林したことから別荘地へと発展した。境川のたもとに山本公園があるが、そこにある「大望の像」の碑文は「片瀬砂漠」と呼ばれる地を別荘地にするために松を植林したと記している。

松林には防砂と防風に効果がある。松林の中で人は快適な生活ができる。葉山の御用邸は、まさに松林の中にあり、海風はぴたりと止み、建物への塩や砂の影響も抑えられる。松林に守られた地には桜や楠など他の樹木の生育も可能である。

鵠沼の地を住みやすい場所にした松がなくなっていく。去年の台風や水害からわかるように最近の自然現象は異常である。今後も暴風雨がますますひどくなるであろう。昔のような松林に囲まれていれば被害を少しでも軽減できるであろうと考える次第である。（大川 久）

コーヒースレイク Coffee Break コーヒースレイク Coffee Break コーヒースレイク

第43回 鵜沼地区公民館まつりで展示 タイトルは「平成をふりかえる」

今年の「鵜沼地区公民館まつり」は10月19、20日の2日間、催され、各サークルとも種々のイベントを企画、好天にも恵まれ盛況でした。

思いかえすとわがサークル「鵜沼を語る会」の展示テーマは例年になく早々と決定しました。

いつもなら5月の総会で新年度の方針が決まってから7～8月頃に漸く展示テーマが決まるのですが、今年は旧年度中の3月の運営委員会の席上で“5月1日



には元号が平成から令和に改定されるから、平成時代をふりかえてみるのはどうか”との発案があり“これは今年にしか出来ないね”と平成31年を年代順に、世界・日本国内・藤沢鵜沼近辺の移り変わり・わが会の活動状況を一覧にしようという企画が出来ました。4月例会で出席者全員の賛同を得て、早速、計画に着手。まず鵜沼近辺の出来事を、各自思いつくままホワイトボードに列記して行きました。

列挙された事柄がいつの事かを調べる地道な作業が始まりました。

「いつ、どんな事があったか」は比較的容易に検索できますが「ある出来事が、いつの事か」という逆算は意外に手間取ることが多く、それも地元の小さな事、例えば「電柱に海拔表示が



9月例会での貼り付け作業

されたのはいつか」
とか「街路灯がいつ
蛍光灯からLEDに変
わったか」などロー
カル新聞やインタ
ーネットでも検索
できない事柄を調
べるのが大変だっ
たと聞いています。

その作業も進み
7月頃から展示の
骨格が出来ていき



展示に見入る人々

ました。8月例会では、A4の用紙に出来事をプリントしたものを台紙に貼ったサンプルを掲示して、会員の皆さんに展示のイメージを見て貰いました。

9月例会は出席の会員全員が協力して、出来事を列記した用紙（A4, A5）127枚を台紙（全紙ラシャ紙）11枚に貼りつける作業をし、展示物が完成しました。

タイトルも幾案かの中から「平成をふりかえる」に決まりました。まつりの1ヶ月も前に展示物が出来上がったのは、はじめての事だと思います。

10月例会では、まつり2日間の午前・午後の当番の方々も決まりました。会場の飾り付けは、10月17日（木）午前10時から、展示場は例年の通り第3談話室です。壁面長7.2メートルびっしり、圧巻の大年表が張り出されました。

当番をされた方の報告では当会の展示を観覧にお見えになった一般のお客さまが「改めて平成を顧みた」と感想を述べて居られたとの事です。また、来場者を見て居りますと、サーッと素通りする方と、じっくり時間をかけて仔細にご覧になる方と、はっきり二分されるという興味深い現象が見られました。

撤去作業は20日午後3時から、その時、会場に居合わせた会員で撤去にかかり小一時間で終了しました。

最後になりましたが、今回の展示の企画、資料の収集、展示物の作成、当日の当番、展示の設営、撤去。および、当会に課せられた「まつり全体」のなかでの役割分担を受け持って下さった方々、ほんとうにご苦勞様でした。（Y.W）

平成をふりかえる 鵜沼周辺と鵜沼を語る会の出来事

2019年10月19-20日開催の鵜沼地区公民館まつりで、当会は『平成をふりかえる』というテーマで平成30年間の出来事を調べて展示した。
世界、日本での出来事と対比した展示だったが、ここでは鵜沼周辺と鵜沼を語る会での出来事（写真割愛）に絞って掲載する。

＜鵜沼周辺の出来事＞

平成 西暦

- 1 1989
 - ・片瀬江ノ島駅前で暴走族住民殺人事件
 - ・鵜沼地区案内板（鵜沼、本鵜沼、鵜沼海岸、鵜沼神明、石上）
5か所に設置
 - ・藤沢警察署庁舎完成
 - ・辻堂海浜公園オープン
 - ・藤沢市民病院新館落成
 - ・JRビュープラザ開設
- 2 1990
 - ・豪雨で鵜沼橋落橋
 - ・長久保公園開設
 - ・サーフ90開催
 - ・市民ギャラリー岸田劉生「麗子と鵜沼風景」展
 - ・慶應大学湘南キャンパス開設
 - ・市営火葬場「藤沢聖苑」開設
- 3 1991
 - ・湘南なぎさ荘開設
 - ・湘南赤十字センター藤沢献血ルーム開設
 - ・引地川に親水公園開設
- 4 1992
 - ・慶應湘南キャンパスに中高新設
 - ・市の鳥カワセミに決定
 - ・第2蓮池にマコトハス植付
 - ・鵜沼銀座通り、マリンロードと改称
 - ・市民ギャラリー長谷川路可展
- 5 1993
 - ・鵜沼中学校に屋内運動場、屋上プール完成
 - ・鵜沼市民の家開設

- ・藤ヶ谷市民の家開設
- ・江の島岩屋 22 年ぶり再開
- 6 1994
 - ・鵜沼伏見稻荷新社殿落成
 - ・国道 134 号線藤沢市域 4 車線に拡幅
 - ・鵜沼海岸駅前に有料駐輪場開設
 - ・湘南ナンバーの地域決定
- 7 1995
 - ・聶耳の兄が来日、聶耳碑に献花
 - ・藤沢メダカ固有種認定
 - ・防潮堤整備始まる
 - ・7 市町村の農協が合併し JA さがみ発足
- 8 1996
 - ・第 1 回江の島ドラゴンボートレース開催
 - ・文書館で葛巻文庫と芥川龍之介資料展開催
 - ・湘南白百合学園に青い目の人形、米国から寄贈される
 - ・市内に 〇157 患者発生、学校給食すべて加熱処理
 - ・レディオ湘南開局
 - ・名店ビルの貴金属店で 122,000,000 円相当盗難
- 9 1997
 - ・小田急江ノ島線全線ロングレールになる
 - ・秩父宮体育館リニューアル
 - ・江の島でアオノリュウゼツラン開花
 - ・サーフビレッジ竣工
 - ・鵜沼中学校創立 50 周年
 - ・西友藤沢西武店閉店
- 10 1998
 - ・「神奈川ゆめ国体」秋葉台、江の島、秩父宮体育館、八部野球場で
マスコットは「かなべえ」
 - ・八部に屋内プール、ジム、浴室完成
 - ・蓮池の動植物の実態調査開始
- 11 1999
 - ・小田急湘南台駅に相模鉄道、横浜市営地下鉄道が接続
 - ・新林公園西側斜面で大規模土砂崩れ発生
 - ・マリナランドで電気ウナギによるクリスマスツリー点灯
- 12 2000
 - ・第 1 回遠藤あじさい祭
 - ・鵜沼小に鵜沼児童館「わんぱくワールド」開設
 - ・蓮池の木道リニューアル
 - ・荏原製作所のダイオキシン引地川に流出
 - ・小田急プールガーデン閉鎖

- 13 2001
 - ・東屋記念碑建立
 - ・JR 湘南新宿ライン運行開始
 - ・大庭遺跡調査で旧石器時代の日本最古の石切場出土
 - ・江の島八坂神社の祭囃子を県無形文化財に指定
- 14 2002
 - ・旧近藤邸有形文化財登録
 - ・江ノ電開通 100 周年 501 型お別れ運転
 - ・江の島マリンランド閉鎖
 - ・市生涯学習大学開校
- 15 2003
 - ・江の島シーキャンドル点灯
 - ・鵜沼公民館市民センター併設
 - ・鵜沼郷土資料展示室開設
 - ・鵜生園鵜沼海岸から片瀬へ移転
 - ・湘南モルフィルがオープン
- 16 2004
 - ・鵜沼女子高校、男女共学とし鵜沼高校と改称
 - ・小田急快速が本鵜沼、鵜沼海岸駅通過
 - ・湘南学園全面リニューアル
 - ・本鵜沼駅東口開設
 - ・新江ノ島水族館「えのすい」オープン
- 17 2005
 - ・片瀬漁港に米軍ヘリコプター不時着
 - ・旧高木和男邸老人福祉活動拠点「ふれあい荘」となる
 - ・江の島でハヤブサが営巣抱卵巣立ちまで確認
 - ・県なぎさ体験学習館で神奈川メダカサミット開催
- 18 2006
 - ・第 1 回藤沢宿遊行寺の盆
 - ・ビーチバレー発祥の地の碑建立
 - ・鵜沼中学の生徒が「鵜沼の町を守ろうー8 つの提言」小冊子発行
- 19 2007
 - ・第 1 回湘南国際マラソン開催
 - ・有料ごみ袋によるゴミ収集始まる
 - ・第 1 回廃材ボートレース開催
 - ・旧モーガン邸放火により損焼
 - ・ユニオン鵜沼店開業
- 20 2008
 - ・旧後藤医院が鵜沼橋市民の家となる
 - ・片瀬漁港新装なる
 - ・第 1 回小出川彼岸花まつり
 - ・本鵜沼市民の家リニューアルオープン

- ・旧モーガン邸再び放火にて全焼する
- 21 2009
 - ・第 1 回鵜まつり(八部公園)
 - ・鵜沼藤が谷青少年支援拠点「悠生館」設立
 - ・境川遊水池公園にハクチョウ飛来する
 - ・引地川で迷い鮭遡上
- 22 2010
 - ・江の島花火 10 月開催となる
 - ・市制 70 年記念TUBEコンサート
 - ・旧後藤医院有形文化財登録
- 23 2011
 - ・第 1 回湘南藤沢市民マラソン開催
 - ・大腸がん検診無料化
 - ・体長 70 cmのワニガメを境川で保護
 - ・空乗寺の首塚再建
- 24 2012
 - ・電柱に海拔表記
 - ・第 1 回 旧東海道藤沢宿まつり
 - ・海岸に津波避難塔完成
- 25 2013
 - ・地震津波対策避難訓練実施
 - ・市民病院救命救急センターに救急ワークステーション設置
 - ・廃材ボートレース今年限りで終了
- 26 2014
 - ・江ノ電初のエレベーター鵜沼駅に設置
 - ・林達夫邸有形文化財登録
 - ・第 1 回ビーチサッカー開催
 - ・サイクルチャレンジカップ藤沢開催
 - ・主婦が幸せに暮らせる街 NO 1
- 27 2015
 - ・江の島新ヨットハウス竣工
 - ・第 1 回藤沢ワインまつり
 - ・第 1 蓮池の舞妃蓮、最初の花が咲く
 - ・県女性センター閉鎖
 - ・湘洋中学校に避難塔完成
 - ・ご当地ナンバープレートデザイン決定
- 28 2016
 - ・2/9 両陛下鵜沼ご来臨(ご学友訪問)
 - ・蓮池に藤沢メダカ放流
- 29 2017
 - ・鵜沼海岸郵便局移転
 - ・防犯灯、蛍光灯からLEDになる
 - ・ヤオコー片瀬店オープン

- 30 2018 ・本鵜沼と鵜沼海岸の小田急ショップ(キオスク)閉店
 ・藤沢市新市庁舎落成
 ・尾日向邸有形文化財登録
- 31 2019 ・4/15 Odakyu OX 江の島店オープン
 ・小田急デパートがリニューアル ODAKYU SHONAN GATE となる
 ・八部プールで子供セーリング体験

＜鵜沼を語る会の出来事＞

凡例

公民館まつり展示テーマは[]で括った。

公開講座・出張授業・見学会・出版・記念事業などの区分は()で示した。

会誌はその年に発行したもので年度別ではない。

平成 西暦

- 1 1989 [ふるさと民芸家屋と山草展]
 ・「鵜沼懐古展」(鵜沼公民館:展示)
 ・宮ヶ瀬ダム・日向薬師(見学)
 ・日本民家園(見学)
 会誌 46～50 号
- 2 1990 [里に息づく馬頭観音と馬のルーツを訪ねて]
 ・南足柄の文化財(見学)
 会誌 51～56 号
- 3 1991 [引地川を調べて見れば]
 ・三浦半島の文化財(見学)・引地川の水源探訪
 会誌 57～62 号
- 4 1992 [芥川龍之介と鵜沼 生誕百年記念]
 ・藤沢市北部の自然と文化財を訪ねて①(見学)
 会誌 63～65 号
- 5 1993 [鵜沼村のくらし]
 ・関根佐一郎宅雨乞竜制作実演(見学)
 ・藤沢市北部の自然と文化財を訪ねて②
 ・鵜沼小学校(出張授業)

- 会誌 66～68 号
- 6 1994 [昔の遊びとこども達]
- ・藤沢北部と高谷大神宮(見学)
 - ・「鵜沼村の暮し」「昔の暮しとこども達」(JR藤沢駅地下通路:展示)
- 会誌 69、70 号
- 7 1995 [鵜沼南部の道]
- ・江の島の地理と史跡(見学)
 - ・辻堂地区の古道を歩く
- 会誌 71、72 号
- 8 1996 [鵜沼を語る会 20 年の歩み]
- ・東屋離れ「杉沢邸」実測作図(調査)
 - ・江の島古道を歩く
 - ・会誌『鵜沼』1～30 号合本(出版)
- 会誌 73、74 号
- 9 1997 [写真展 現在の鵜沼昔の鵜沼]
- ・茅ヶ崎文化資料館と平塚市立博物館(見学)
 - ・『村川堅太郎と松が岡公園』村川夏子氏(講演)
 - ・湘南学園中学(出張授業)
- 会誌 75 号
- 10 1998 [鵜沼の別荘]
- ・大磯町吉田邸・大隈邸・池田記念館・嶋立亭(見学)
- 会誌 76、77 号
- 11 1999 [塩沢コレクションから]
- ・鵜沼本村を歩く(見学)
 - ・『女学世界に咲いた花-内藤千代子』森山敬子氏(講演)
 - ・『少年のころの鵜沼』葉山峻氏(講演)
- 会誌 78、79 号
- 12 2000 [鵜沼商店街 100 年の歴史]
- ・辻堂南部史跡巡り(見学)
- 会誌 80、81 号
- 13 2001 [華ひらいた鵜沼文化:東屋と文人たち]
- ・東屋記念碑除幕(式典列席)
 - ・『東屋と文人たち』小山文雄氏(講演)
 - ・『芥川龍之介「蜃気楼」を中心に』佐江衆一氏(講演)

- ・藤沢・片瀬間「江の島道」を歩く(見学)

会誌 82、83 号
- 14 2002 [鵜沼の半纏]
 - ・「華ひらいた鵜沼文化展」(市民ギャラリー:展示)
 - ・松が岡公園に「桃の木」(植樹)
 - ・ホームページ開設(広報)

会誌 84、85 号
- 15 2003 [写真で見る鵜沼の今昔]
 - ・藤が谷、松が岡地区の著名人住居跡を巡る(見学)
 - ・鵜沼中学校「鵜沼の歴史」(出張授業)
 - ・お松さんと鵜沼をあるく(見学)

会誌 86、87 号
- 16 2004 [鵜沼浦の地引網]
 - ・今井達夫作品複製『会誌別冊』(出版)
 - ・辻堂・茂兵衛資料館(見学)

会誌 88、89 号
- 17 2005 [鵜沼を語る会 30 年の歩み]
 - ・鵜沼ゆかりの文化人展:郷土資料展示室(展示)
 - ・『鵜沼残照』小山文雄氏(講演)
 - ・我孫子志賀・武者小路・村川別邸(見学)
 - ・広報ふじさわに「鵜沼を語る会」紹介記事

会誌 90、91 号
- 18 2006 [鵜沼の生物たち]
 - ・創立 30 周年記念「シダレザクラ」(植樹)
 - ・鵜沼中学校「鵜沼と芥川龍之介」(出張授業)
 - ・引地川をさかのぼる(見学)

会誌 92、93 号
- 19 2007 [鵜沼に楷の木を]
 - ・羽鳥耕余塾と付近の史跡巡り(見学)
 - ・松が岡公園に「楷の木」(植樹)
 - ・鵜沼中学校に「楷の木」寄贈(植樹)
 - ・片瀬中学校に「楷の木」寄贈(植樹)
 - ・第一中学校に「楷の木」寄贈(植樹)

会誌 94、95 号

- 20 2008 [阿部昭の鵜沼風景]
- ・『鵜沼村庶民の弘法大師信仰』圭室文雄氏(講演)
 - ・『阿部昭の鵜沼風景』島本千也氏(講演)
 - ・片瀬カトリック教会長谷川路可宗教画(見学)
- 会誌 96、97 号
- 21 2009 [相模国準四国八十八カ所のうち鵜沼の札所を巡ってみました]
- ・鵜沼ゆかりの文化人(出版)
 - ・相模国準四国八十八カ所 4 班各 22 か所の札所現状(調査)
 - ・鵜沼公民館 50 周年「楷の木」寄贈(植樹)
- 会誌 98、99 号
- 22 2010 [藤沢を中心とした文化人の集り「すわん会」]
- ・『相模国準四国八十八カ所ガイドブック』(出版)
 - ・市立図書館に内藤千代子著作復刻、(寄贈)
 - ・「歴史講演会と研究報告」圭室文雄氏:労働会館(講演)
 - ・「岸田劉生と鵜沼」全 6 回:岡田会員(レディオ湘南放送)
 - ・六会中学校に「楷の木」寄贈(植樹)
 - ・県立神奈川近代文学館に今井達夫著『水上淹太郎』自筆原稿(寄贈)
- 会誌 100、101 号
- 23 2011 [鵜沼と馬込文士村]
- ・馬込文士村と大田区立郷土博物館(見学)
 - ・鵜沼の札所を巡る(見学)
- 会誌 102、103 号
- 24 2012 [芥川龍之介と鵜沼との関わり]
- ・今井達夫著『馬込文士村二十年』(出版)
 - ・大田区立郷土博物館に今井達夫著『馬込文士村二十年』自筆原稿贈呈(寄贈)
- 会誌 104、105 号
- 25 2013 [鵜沼を語る会をご存知ですか]
- ・藤沢の巨樹巡り全 6 回完了(調査)
 - ・総合ミュージアムを作ろう展:市民ギャラリーに参加
 - ・「芥川龍之介と鵜沼との関わり」(展示)
- 会誌 106、107 号
- 26 2014 [子供のころの遊び]

- ・寒川文書館と寒川地区札所寺院（見学）
会誌 108、109 号
- 25 2015 [鵜沼にこのような人が住んでいました]
 - ・『鵜沼の作家阿部昭を語る』佐江衆一氏（講演）
 - ・日本民芸館と日本近代文学館（見学）
会誌 110、111 号
- 26 2016 [日本のマザーテレサは鵜沼にいた—災害ボランティアの先駆け
 颯田本真尼]
 - ・今井達夫著『鵜沼物語』（出版）
 - ・湘南白百合学園「子供のあそび」（出張授業）
会誌 112、113 号
- 29 2017 [岸田劉生来鵜 100 年—絵日記から分かる鵜沼での生活]
 - ・藤嶺学園に今井達夫の著書（寄贈）
 - ・ふれあい荘に保管中の会の資料整理
会誌 114、115 号
- 30 2018 [江の島に三重塔があったのをご存知でしたか]
 - ・『江戸時代鵜沼村の弘法大師信仰』圭室文雄氏（講演）
会誌 116、117 号
- 31 2019 [平成をふりかえる]
 - ・鵜沼市民センター賀詞交換会々場に「江の島に三重塔があった
のをご存じでしたか」（展示）
会誌 118、119 号

海の不思議（海難の謎のエピソード）

内田 進之助(会員)

「海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がある。そして母よ、佛蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある。」（三好達治詩集「測量船」より「郷愁」）

今日は奇しくも「海の日」である。神戸生まれの小生は子供の頃から海と船に親しんで育った。港を見下ろす山裾の我が家の二階で夜半ふと目覚めた時、夜を徹して貨物船の荷役をしているクレーンの物音や岸壁で動いている貨物列車や曳船の汽笛などを聴いてはその辺りの光景に想いを馳せたり、また須磨の浦で海水浴をしながら沖を行き来する様々な船を眺めて、いつか自分もそのような仕事をしたいと思っていた。不思議なものでそれが生涯の天職となり、更に海と船についての秘話を蒐集する趣味も嵩じて今日に至っている。今回はその中で、幾つかの「海難の謎」についての若干のエピソードを披瀝したい。

＊

そもそも海は、我々人間ばかりでなく、地球上の全生物に限りない自然の恵みを与えてくれている。海があるからこそ、地球は太陽系で唯一の豊かな衛星として存在できたのである。しかし、一般の人々が親しんでいる海は陸地の延長としての大陸棚のごく限られた一部にしか過ぎず、そのすべてについては余り知られていない。

海の面積は地球表面の70%で陸地の2.4倍を占め、深度は平均で3,800メートル、最深のマリアナ海溝は実に1万920メートルの深さである。

三大洋をまたぐ海底には高さ3～4,000メートルの山脈、いわば富士山クラスの山々の嶺が6.5万キロメートルも続いている。

しかも、この深海底には豊富な資源が分布している。石油の全世界の採掘量はあと5、6年でその4分の1を海底に依存することになり、そのほか熱水鉱物床といわれるものがあってマンガン・リチウム・金・銀などの貴重な鉱物資源の塊りがごろごろと転がっているのである。それは海底の割れ目に染み込んだ海水がマグマの熱で高温になって金属すべてを溶かし込み、一旦上昇してから冷やされて、再び沈澱してできたもので、その存在している位置が余りにも深すぎるためまだ商業ベースの採掘は難しいが、いつかは開発が期待されている。

更に、深海底のあちこちには、「メタンハイドレード」と呼ばれている物質が

膨大な量で存在しているが、これはメタンガスが水の分子と結びついてできたメタン氷の地層で、1立方センチメートルの塊りに164倍のメタンガスが閉じ込められているいわば海底に眠るガス貯蔵庫であり、将来は石油に代わる貴重なエネルギー源となる可能性を秘めているとしてかなり注目されている。通常、この「メタンハイドレード」の堆積層は水中に安定して存在しているが、もし何らかの理由でこれが破壊されると大量のメタンガスが泡となって海面上に噴出し、偶々その付近にいた船舶・航空機や海上構造物に深刻甚大な被害を与え、気象的には地球温暖化にも繋がり、多大な悪影響を齎すのである。

＊

さて先ず取り上げたい話題は「バミューダ・トライアングル」である。これは大西洋の米大陸寄り、フロリダ半島の先端（マイアミ付近）とプエルトリコとバミューダ諸島とを結ぶ約800平方キロの三角形の海域を云い、昔から多くの船や航空機が乗組全員ともども痕跡を残さず消滅したことで有名である。

記録に残っている船舶の遭難は19世紀以来頻発しており、航空機は1945年の米海軍5機が最初で、「白い嵐の中に突入、現在位置は不明」との通信を発したのち失踪し、救援に向かった飛行艇一隻も現場上空で爆発して消滅したことが目撃されている。現在までに海空合計100件以上、行方不明者千数百人の事故が報告されているが、その中には米・英・仏・独・中南米等の船・航空機も含まれ、更に日本船「来福丸」も1924年に「ヒ首にさらされたようだ」との不可解な通信を残して消滅している。

また一旦消えた船が貨物を積んだまま後日発見されたケースも複数あり、このときは乗組員全員と羅針盤・六分儀が見付かっていないといわれている。

その他の事件としては、事故発生後暫くの時日を経過してから問題の船や航空機からの信号があったという事例がある他、30数年前に消えたチリの旅客機と戦闘機が外見はそのままの状態で見つかったという奇談もある。

この不思議な謎を解明するに当たり、近年色々な角度から多くの研究者が様々な仮説を唱えている。

元来この辺りは「サルガッソー(海藻)海」と呼ばれ、大量の海藻が発生・漂流している場所で、帆船時代には船乗り達に「難破船の墓場」として忌避されていたため、「魔の三角海域」として殊更に取り上げられたらしいが、この原因は現

代の動力船や航空機には当然影響は全くない筈である。

その後「ダウンバースト」と云われる強力な下降気流が一つの原因として考えられた。これは熱帯の海上で温められて上空に舞い上がった空気が大量の積乱雲（スーパーセル）を発生させ、そのエネルギーが再び海に戻っていく過程で起こるものとされている。しかしこの説では、航空機について墜落はともかく爆発は説明できない。

その後大きく採り上げられたのは前述の「メタンハイドレード」説で、これは或る程度の実験でも証明されている。この海域では大量のメタンが検出されており、世界最大の暖流が複雑な蛇行を繰返しているため、メタンハイドレードが非常に崩壊し易い環境となっている。泡となって海面に達したメタンガスに含まれたマイナスイオンが電流即ち磁界を発生させて船のコンパスを狂わせたり、その浮力を低下させて遂には沈没させるし、更に空気中を上昇して航空機に達するとエンジンプラグに引火して機体を爆発させることもある。

しかしこの説では完全に説明できない現象が発生していることも事実である。そこで最近はこれを発展させた「大気プラズマ」説が有力になっている。

「プラズマ」とは原子核と電子が分離（電離）した、物質の三態（固体・液体・気体）の何れにも当てはまらない放射体のようなものを云い、極地で見られるオーロラは壮大な大気プラズマ現象の一種である。即ち膨大な量のメタンガスが磁気の異常を引き起こして空気をイオン化することが大気プラズマの発生条件を高めているとも考えられ、これが怪光現象の原因として説明されていて、歴史的にもコロンブスがバミューダ付近の海上でこの現象を見た記録がある。

そしてこの「プラズマ」は、現に核融合、溶接、カーボナノチューブ等の高度の技術の諸分野に応用されている一方、人間の脳波に影響を与え、幻覚症状を引き起こす可能性があり、超常現象の原因となっていると唱える説もある。

この点は「バミューダ・トライアングル」に関する他の諸説、即ち「ブラックホール」説、「異次元空間」説や、「宇宙人（UFO）関与」説等とも関連があると云え、あながちこれらを荒唐無稽な説と無視することも出来ない。

＊

— やや余談になるが、バミューダは17世紀以来英国の海外自治領で、元首はエリザベス2世であり、総督が代行している。国土は大小合計150の島と珊瑚礁から成っている面積53.3三平方キロ、人口6万6000人の小国だが、モット

ーが「運命の赴くままに (Quo Fata Ferunt)」であるのは皮肉である。金融と観光が主要産業で、租税回避地として多業種・多数の国際企業が名目的な本社を置いており、2005年のGDPは世界第一位である。小生が業務上長年に亘って密接に関与してきた或る有力海外船主も実務は香港・フィリピン・カナダ・英国・日本の子会社で行なっているが、それらすべての出資親会社はバミューダの弁護士事務所の住所に登録されており、実態については社長の親族以外には全く知らされていないー

＊

前述のとおり不可解な海難事故が「バミューダ・トライアングル」で頻発していることは事実だが、同様の事故は地球上の他の海域でもかなり起こっている。

日本列島の南方、野島崎・小笠原諸島・グアムを結ぶ太平洋西南部の三角海域も「ドラゴン・トライアングル」と呼ばれ、ここでの代表的な事故は1969年1月の「ぼりばあ丸」沈没である。ジャパン・ラインが所有運航中であったこの新造後3年、5万4000積載重量トンの鉱石専用船はチリのサンニコラスを出港し、野島崎南東500キロの海域を川崎向けに航海中、突如船首部分が折損脱落し、約一時間後に沈没、乗組員33人のうち、2人だけが救助されたが、残り全員は行方不明となった。偶々付近を航行中であった定期貨物船「健島丸」の船長の双眼鏡には船尾が垂直になって沈んでゆく巨船の信じられない姿が捉えられていた。この事故に関しては不気味な逸話があり、積地出港前に本船乗組員全員が寄せ書きして東京の本社に郵送した年賀葉書には本船の前半分だけが横に描かれて後半が全く脱落した絵が背景とされていたそうである。

この海域では、翌年2月にも船齢四年の同型船「かりふおるにあ丸」が同様の船体破損により沈没し、救助を拒んで本船と運命を伴にした船長のほか4名が死亡している。

これらの事故はわが国の海運・造船業界と関連官庁・団体に大きな衝撃を与え、原因の究明に種々真剣な努力が払われたが、結論には至らずじまいであった。また、この海域ではその他多くの海難事故が発生しているのも事実で、最大のものは、多少西にずれるが、先の大戦中フィリピン東部海域で米国海軍艦隊が台風に遭遇し、駆逐艦一隻が沈没した他多数の軍艦と艦載機が大被害を被り、800人以上が犠牲になっている。その時の信じ難い逸話としては、殆ど真横に近く傾いて転覆寸前となった艦が奇跡的に復元して沈没を免れ、乗組員全員は無事だったが、そのマストは恰も天空から巨人が腕を伸ばして掴み上げたようにほぼ直角に曲が

っていたそうである。

また南シナ海では、明治 19 年日本海軍がフランスに発注した巡洋艦「敵傍」が処女航海でわが国に向かう途中、突如消息を絶ち、日仏海軍将兵全員 90 名が行方不明になった事故も発生している。

更に最近でもわが国の漁船事故がこの海域周辺で続発しているが、中でも 2008 年 6 月 23 日の巻き網漁船第 58 寿和丸が犬吠崎沖東南 350 キロで沈没した事故は当初波高の高い三角波によるものとされていたが、専門家は生存者（乗組員 20 人中 3 名）の証言から、巨大な「フリーク（気紛れ）波」が原因であろうと新たに指摘している。これは平穏な海面で突如出現して壁のように聳える波で 20 メートルを超える高さもあり、破壊力が強烈である。

1980 年 12 月やはりこの付近で遭難した「尾道丸（5 万 6000 載貨重量トン、船齢 15 年）」の事故もこれが原因と見られ、巨大な波の壁に乗り上げた後、海面に叩きつけられ、船首部分が折損・脱落して沈没したが、幸いすぐ近くを航行中の他船に乗組全員が無事救助されるという稀有なケースとなった。

＊

さて、海難の問題点についての結論的な考えを纏めたい。

今まで述べてきたような海域で発生した事故の原因のすべてが不可解な謎というわけではなく、各種の報告の中には誤解や思い込み、更には捏造・歪曲に基づくものもかなり多いし、またそれ以外の多くの海域でも同様の奇妙な事故が発生している。例えば北米の五大湖でも「大気プラズマ」に関わっていると思われる怪光現象が目撃されており、船舶や航空機の事故の実例は多い。

即ち、地球上の何処で発生したものであろうと、報告された事故の中で、理論的に完全に解明され得なかったものがかなりあるのは紛れもない事実で、今後の研究が大いに期待される。個人的には「メタンハイドレード」説から「大気プラズマ」説に発展した仮説を更に深化させ、「電磁波」と「異次元空間（宇宙人との関連）」を含めた解明に努力してほしいと思っている。

本来「海」という漢字の語源は「晦」からきて、「くらい」とか「くらます」ことも意味しており、海は平穏な状態ばかりでなく、時に一転、人間を恐怖の奈落に陥れることも多いのである。

この海の上で人生を賭けて働いている船乗りたち全員に、心からの敬意と感謝を捧げたいと思う。

（うちだ しんのすけ）

鵠沼雑記（三）

古志 秋彦

「くげぬま」という和名のついた植物がある。地域的な俗称などではなく『牧野新日本植物図鑑』にも「くげぬまらん（*Cephalanthera Shizuoi F.Maekawa*）」として記載されている由緒正しいラン科の花である。

同書には「〔日本名〕鵠沼蘭で、鵠沼は神奈川県藤沢市に属する地名、最初服部静夫氏が同地で発見したのによる」と記されている。しかし鵠沼の開発がすすむとともに姿を消し、このごろは「幻の花」といわれてきた。

＊

江ノ島電鉄の鵠沼駅に近い境川に、境橋という橋がかかっている。長さ五十メートル、幅六メートルほどの小さな橋だが、近年掛け替えられて、その金属製の欄干の飾りにクゲヌマランの透かし彫りがデザインされている。この図柄採用に当たっては、クゲヌマランの再発見の物語が秘められていた。

欄干の下の方に、次のような簡単な説明文も付いているが、文字が小さいためか目に留める人は少ない。本文は横書きである。

くげぬまらん

相模湾沿岸の海岸砂丘松林の中に自生していた多年草で高さ 40 cm内外、花は白色である。

名前の由来は 1935 年ころ、この鵠沼の地で発見され命名された。

一九三五年といえば戦前の昭和十年である。当時、東大助教授の服部静夫博士は鵠沼海岸で病氣療養をしていた。いまの湘南学園付近で、砂地の松林のなかであった。四月末か五月初め、服部博士は散歩の途中で白い花を付けている可憐なランをみかけた。

全体がスズランに似ているが、花は下を向かず上向きになって、小型のチューリップのようにわずかに開きかけていた。のちに白い花びらが完全に開かないのが、この花の特徴であることが分かった。清楚な感じの気品のある花で、それまで余り人目にふれることもなく、ひっそりと松林の陰に隠れていたものであろう。

新種のランらしいと思った服部博士は、自身は植物生化学が専門だったので当

時、新進の分類学者だった前川文夫博士に調査を託された。前川博士の研究によって新種であることが確認され、種小名(学名)には発見者の名に因む「*Shizuoi*」が付けられた。

＊

戦後はご多分に漏れず、東京近郊の鵜沼は住宅地として開発の波をかぶり、大きな邸宅は細分化されて分譲されていった。松林は切られ、砂丘も崩されて、クゲヌマランも次々に姿を消してしまった。

牧野『植物図鑑』では「相模川沿岸から千葉県にかけての海岸砂丘松林の中に自生する」と記されているが、昭和三十三年（一九五八年）発行の『神奈川県植物誌』によると「現在はほとんど見当たらない」ということになってしまったのである。

同五十年（一九七五年）に県立博物館が、博物誌づくりのため調査した時も発見できず、近縁種のハマカキラン（浜柿蘭＝やはり鵜沼がタイプ標本の産地）も見付からなかった。クゲヌマランは「三年前を最後に絶滅した」ものとおもわれた。

鵜沼海岸に住んでいた郷土史家の塩沢務氏は、この絶滅宣言にもかかわらず、どこか広いお屋敷の庭には、まだ生き残っているに違いないと熱心に調査していた。しかし発見できないまま、生物の生活環境は年々悪化していくばかりだった。

そして塩沢氏も、もう諦めかけていたころ、偶然の事から朗報がもたらされた。クゲヌマランは、やはり鵜沼海岸の会社役員の庭でひっそりと生きていたのである。昭和五十八年（一九八三年）五月の事で、最初の発見から、半世紀近くの再発見だった。

その後、クゲヌマラン自生地は鵜沼に二か所、茅ヶ崎と平塚に一か所ずつあることが分かったが、乱獲絶滅の恐れから、自生している場所などは、いまでも一切発表されていない。私も藤沢市みどり課が平成六年（一九九四年）五月に作成したビデオ「クゲヌマランと塩沢務」で、塩沢さんが自宅で栽培しているものを見ただけである。

そのクゲヌマランは草丈三十センチほどだった。自然の状態だと四、五十センチになるのだが、鉢植えでは「地熱が少ないためか、やや小振りです」と塩沢さんはいう。茎は直立して、先端に一センチくらいの真っ白い花が五、六個ふくらんでいた。多いときは十五個ほどつくという。

前述のように、花は完全に開ききらず、半開きのままでしおれ、夏にピーナツ

大の実を結ぶ。咲くというよりも僅かにほころびるという感じなのが、いかにも
鵠沼の地にふさわしい。境橋掛け替えに当って、その頃再発見が話題になっていた
クゲヌマランの図柄が採用された。

＊

生育にはクロマツが密接に関係しているといわれ、塩沢さんも「十年未満の若い
クロマツの花粉がないと育たないようです。牧野先生の本にそう書いてあります
」という。そういえば、マツの花粉が飛散し始めるのは四月下旬で、この花の
開花期と一致している。しかし、花粉がどういう役割を果たしているのかは分か
らない。塩沢さんは、昨年亡くなられたので、牧野博士のどの本に書いてあった
のか、いまとなっては聞くすべがない。それに、鵠沼にクロマツが植えられたの
は明治になってからなので、それ以前はどうだったのか。おそらくクゲヌマラン
のほうが、クロマツよりも先住者だったに違いないから、不思議といえば不思議
である。「黒松花粉説」には疑問が残るが、研究しようにもクゲヌマランの個体数
が少ない現状では、謎としておくより仕方がない。それより宅地化にともなって、
鵠沼でも松林が急速に減少していることのほうが問題である。戦前に比べると松
林の規模は、十分の一以下になっているのではないかと思われる。

かつては鵠沼の砂丘の松林では、どこでも「松露」がとれ、海浜の防風林には
セリ科の「浜防風」が生えていた。昭和初期には、藤沢駅で土産品として「松露
の簞づめ」が売られていたこともあったという。戦後、松露や浜防風とともに、
クゲヌマランも姿を消してしまったのだろう。

塩沢さんが書かれた「緑のたより」（一九八三年十月）には「（情報を頂いた）
この方のところへお伺いしてお話の様子によると松露は召し上がっているし、蘭
については二、三年前から小鳥が運んで来たのか白い花が咲き今年もたくさん
殖えたとのことであった。松露は松の根っこ近くに散生していた」と、そのお屋
敷ではいまも松露がとれていることが証明してあった。そういう環境がなければ
クゲヌマランは生育しないのだろう。

塩沢さんが育てていたクゲヌマランは、塩沢さんが会員だった「鵠沼を語る会」
によって、多くの貴重な資料とともに引き継がれている。松露は出ないが、わが
家の庭にも小鳥たちが、クゲヌマランを運んできてくれないだろうかと思ったり
している。

編集注：本稿は第3次『同時代』第7号（1999年12月号）に掲載された。



片瀬川 (第 0011 話)

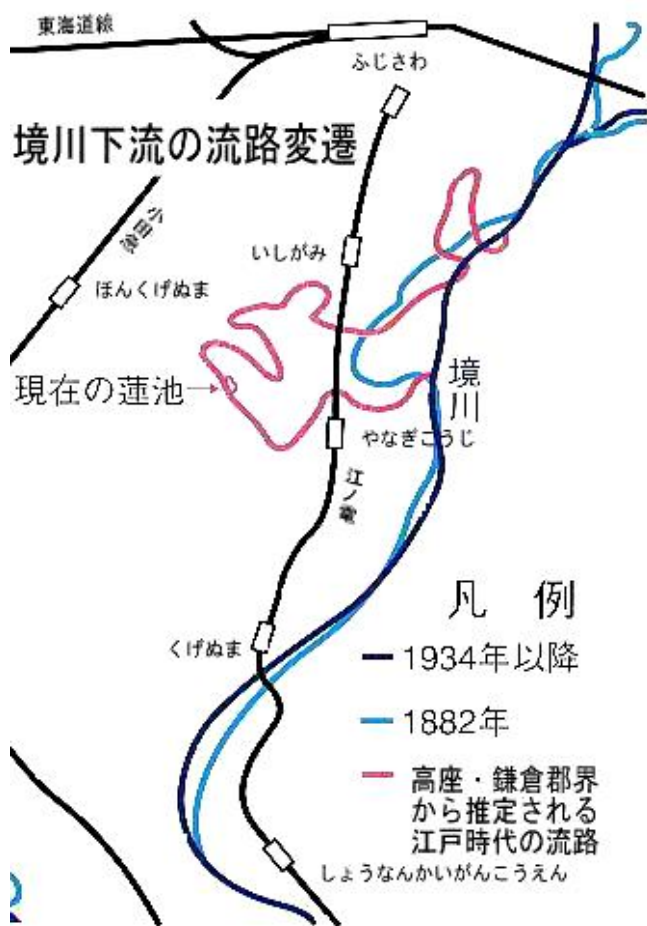
渡部 瞭

鶺鴒地区東縁を流れ、片瀬地区との境界をなす片瀬川は、奈良～平安期には固瀬川と書かれ、他に方瀬、型瀬、渦瀬などとも書かれたという。名称の由来は、片瀬の文字から連想される「この川の兩岸は片方が瀬で、もう片方が淵になっているから」という説が広く知られているが、これはどの河川にも当てはまるので説得力はない。この川が流れ込む片瀬東浜は、遠浅で海底傾斜が緩やかで、平坦である。また、江の島の島陰になるので、波が穏やかである。こういうことから、穏やかな寄せ波が引き波になる前に次の寄せ波が打ち寄せるように見える。このような波を「片瀬波」というから片瀬の地名がついたともいわれる。寄せるばかりで返さないことから、男女間の「片思い」になぞらえられ、これを題材にした流行歌や映画も生まれた。

全体の名称は境川であり、片瀬川はその下流部の通称だから、相模川と馬入川、多摩川と六郷川の関係と共通する。境川は 1594(文禄 3)年、豊臣秀吉没後行われたいわゆる「太閤検地」の際に「高座川を相武の国界とし、境川と称す」として新たに命名されたもので、それまでは全体を高座(たかくら)川(多加久良川・高倉川あるいは田倉川とも)と呼んでいた。高座郡の東の郡境をなしていたからである。最上流は高尾山南麓の草戸山でこの辺では大地沢という流れである。かつては部分的に様々な河川名が見られ、田舎川(大和市付近)、飯田川(中上流部)、俣野川(中下流部)、音無川(藤沢宿付近)などが知られる。固瀬川はそれらよりも古くからの河川名であった。

流路変遷

洪積台地相模野を浸食し、谷底平野を形成してきた境川は、旧藤沢宿南側に形成されていた砂嘴から発達したと考えられる最北の砂丘列を削って海岸平野・湘南砂丘地帯に流れ出す。谷底平野でも曲流(蛇行)が見られるが、海岸平野に出る



と、砂地になるので侵食がたやすく曲流の幅が大きくなる。

上中流では相武すなわち相模国と武蔵国の国境をなしていた境川は、中下流部では高座郡と鎌倉郡の郡界をなす。かつての郡界線は旧流路を示すと思われるから、それを辿ってみると、先ず奥田付近で北へ深く屈曲し、さらに石上付近から西に、曲がりくねっている。郡界線はどの時代に確定したものかは、調べていないが、1700(元禄13)年の『藤沢御殿絵図』にも大きく深く西に屈曲する片瀬川の姿が描かれている。先人はいみじくもこの地を「川袋」

と名付けた。「袋地名」は、河川の曲流によって形成される屈曲部に名付けられ、引地川の「地蔵袋」も知られる。全国的には池袋、沼袋が有名だろう。

近代測量学が導入されて最初の地形図である1882(明治15)年測図の二万分之一迅速図『藤澤駅』によれば、後に江ノ電が通るあたりまでの屈曲が残っているが、ほぼ現在の流路に近くなっている。1917(大正6)年9月30日の出水でショートカットが行われ、現在の流路が確定した。しかし、大水の度に急流路を突進した水は、江ノ電の土手を突き崩したりしている。

川袋低湿地と蓮池については、千一話の中に別項を立てる予定である。

片瀬川の河口

現在鵜沼海岸一丁目と片瀬海岸三丁目との境、すなわち鵜沼地区と片瀬地区との境、かつては高座郡と鎌倉郡との郡境は、肥上げ道が小田急とぶつかるあたり

から、湘南海岸公園中央の海風のテラスへと直線的に伸びている。余りにも直線的なので人為境界線のようなのだが、江戸時代のある時期まではここが片瀬川の河口だったのである。

享保の改革の一環として湘南海岸に置かれた鉄砲場の見取り図には、片瀬古川の名でこの川が描かれ、引地川は肥上げ道あたりをずっと東流し、直接海に出ずに、片瀬古川に注いでいる。

感潮河川片瀬川

私の最後の勤務先となった神奈川県立深沢高等学校の運動場は、片瀬川の支流・柏尾川のいざという場合の遊水地となるように造られていた。校舎は丘陵の山腹にあったが運動場は八反目(はため)と名付けられた元水田地帯で、最寄りのバス停名に残っていた。この辺の柏尾川は、すっかり三面張りの護岸になっていたが、それでも植物が生え、水鳥の姿も見かけた。川面を覗くと、干満の差をкаろうじて読み取ることができた。すなわち、この辺までは感潮河川だったのである。むしろ、本流の境川は、堰跡橋(えんせきばし)あたりで瀬になり感潮区間は終わる。

片瀬川の河口から新屋敷橋(あらやしきばし)上流付近までの間、両岸に隙間なくプレジャーボート類の係留が見られる。これは長期間不法係留として取り締まりの対象とされてきたが、2003年4月から藤沢市は、この不法係留区域を「暫定係留区域」とした。これは取りも直さずこの付近までが感潮河川であるのみならず、両岸の水深がボートの係留や転回に十分であることを示す。

1211(建暦元)年、鴨 長明が飛鳥井雅経と共に鎌倉に下向し、将軍源 実朝と会見する前、砥上が原で固瀬川を渡る際、次の歌を詠んだ。

「浦近き砥上が原に駒とめて固瀬の川の潮干をぞ待(まつ)」

この歌から鎌倉時代初期の片瀬川には橋はおろか渡し舟もなかったことが判る。

鴨 長明の渡河地点はどの辺だったのだろうか。「浦近き」とあるから海岸のそば、「砥上が原に」とあるから鵠沼地区内と考えたい。鵠沼側の鎌倉時代の遺跡は、江ノ電鵠沼駅近くの「下藤ヶ谷遺跡」が最南端である。引地川側には、「八部遺跡」、「藤原遺跡」がある。ここは大庭御厨の最南端集落である。従って、人跡を辿って歩を進めるならば、これらの遺跡を連ねるルートが「浦近き」ルートということになるだろう。

[参考文献]・真船 豊：『片瀬川』東京朝日新聞(1938.7)

引地川 (第 0012 話)

鵠沼地区西縁を流れ、辻堂地区との境界をなす引地川は、大和市上草柳の泉の森からほぼ真南に相模野台地を削って流下する。流路 21.3km、流域面積 67 km²の二級河川である。

1987(昭和 62)年、「ふるさとの川モデル事業」の指定を受け、大庭遊水地の建設で洪水を防ぐと共に、親水護岸や川べり遊歩道の設置など、市民に親しまれる川への取り組みが進められている。

名称の由来は、藤沢市稲荷付近で砂丘を切り割って河道を付け替えたからという説が有力である。それ以前の流路は千ノ川を通して現在の茅ヶ崎市高田付近で相模川旧流路に注いでいたと思われる。私は 1975(昭和 50)年、開校準備段階から、茅ヶ崎市円蔵に開校した県立鶴嶺高校に 13 年間に勤務したが、学校の南方にこの千ノ川が流れていた。当時は相模川旧流路の水田地帯も存在していたが、用水は相模川左岸用水路から供給されていたため、千ノ川は都市化の進展する中で地域住民の下水路としてしか認識されず、悪臭を放つ有様だった。かつては流域に細長い水田地帯があり、千ノ川は農業用水を供給していたのである。河川規模は小流に過ぎないが水田規模はかなり大きかった。これは千ノ川の流量がかつては大きかったことを物語る。人為的に引地川に分水した結果、小流になってしまったのではなかろうか。

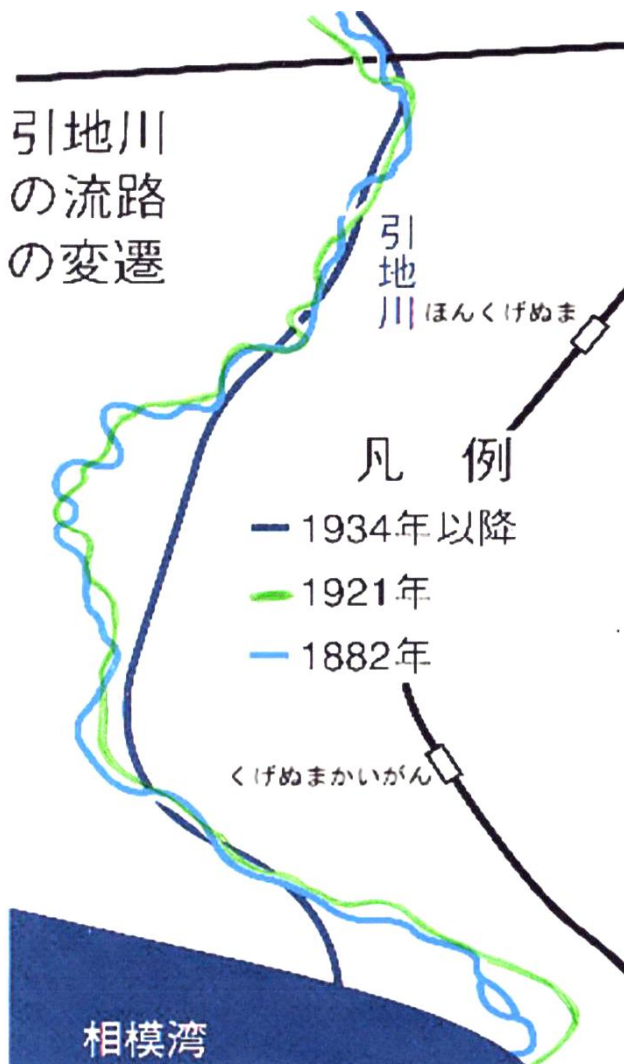
この「引地」の工事がどの段階で行われたか明確な答は見あたらない。読み方は「ひきち」「ひきち」「ひきじ」などが橋の名などに見られるが、公的には「ひきじ」で統一されている。

全体の統一名は引地川だが、上流から様々な河川名が別称として言い継がれてきた。鵠沼地区内では、上流側で「清水川」下流側で「堀川」と呼ばれてきたが、現在は用いられなくなった。

流路の変遷

旧東海道「引地橋」は江戸時代は土橋で、稲荷、大庭、羽鳥、鵠沼の 4 か村がここで境を接していたので、共同で橋の管理に当たった。この引地橋の位置は変わらなかったが、ここより下流は砂丘地帯を流れるため、大水の度に流路がつけ変わるほど曲流が著しかった。近代的な測量技術による地形図が制作されるよう

引地川 の流路 の変遷



になってからも、地形図が発行される度に流路の違う引地川の姿が見られるという状態が昭和に入るまで続いた。

ことに現在の大平橋(たいへいばし)あたりから下流は西へ大きく曲流し、「地蔵袋」と呼ばれていた。この命名の由来は未調査である。

この部分がショートカットされ現在見られる直線的な流路に改修されたのは、1933(昭和8)年に着工し翌年末、完工という驚くべき突貫工事で行われた神奈川県の実業によるものである。この事業は、鵜沼堰開設による堀川田の整備、地蔵袋の交換分合など大きな問題を戦後にまで引きずることになったが、千一話に数項を設けなければ説明できないほど複雑である。

河口部もこの時直線化されたのだが、波浪で破壊される度に河口は東に移動することが繰り返され、最終的にしっかりとコンクリート護岸により固定化されたのは、戦後の1954(昭和29)年のことだった。

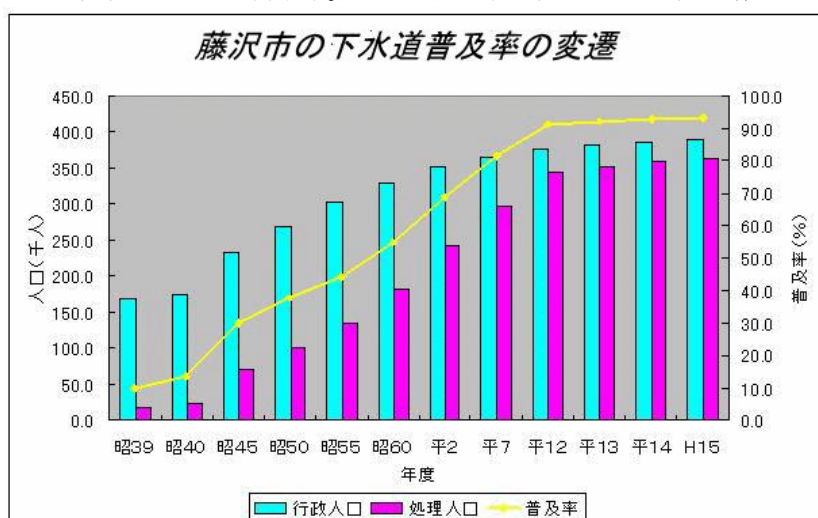
引地川の利用

片瀬川と比べると河川としての規模は小さいから、舟運は盛んでない。古記録を見ると、1775(安永4)年2月に「石川村までの通船許可」とあるから、そのあたりまで遡る高瀬舟はあったのだろう。川幅が狭いだけに橋の数は片瀬川より多い。また、古来用水堰建設や水車揚水も盛んだった。

一方、水質の汚染も目立った。上流にサツマイモ栽培の中心地があり、アルコールの醸造や澱粉の工場が散在し、その残渣を利用する養豚業も「高座豚」としてブランド化した。これらの諸施設から排出される物質が引地川の水質を悪化させ、魚が大量死する事件が頻発したり、鯉ヘルペスが流行したりした。

藤沢市は1969(昭和44)年、全国に先んじて「河川をきれいにする都市宣言」を発した。皮肉な言い方をすれば、河川が汚かったからである。ちょうどこの頃から高度経済成長のひずみが「公害問題」という形で全国各地に表面化していた。

真っ先に取り組まれたのは下水道の普及である。すでに1950年代に南部から始まっていたが、まだ10%程度だった普及率は、順調に上昇し、21世紀に入る頃には90%台に達した(下図)。川のごみを取り除くための除塵機は1990(平成2)年に



引地川上村橋下流に設置された。

こうした取り組みが功を奏した2000(平成12)年、環境システムのトップメーカーである荏原製作所が、

排水設備の不備から環境基準の8000倍を超すダイオキシンを引地川に垂れ流す事件を起こしたことは極めて残念なことであった。

しかし、環境を守ろうという市民の取り組みも熱心に進められ、引地川に清流が戻り、サケの遡上も報告されるまでになった。最下流部の水辺では、カヌーの練習をする子どもたちの姿を目にすることができる。1981(昭和56)年に発足した湘南カヌースポーツクラブの活動する姿である。彼らの中から既にオリンピック選手を輩出している。(わたなべ りょう)

[参考文献]・藤沢市教育文化センター：藤沢の自然6『身近な川と水辺』(2007)

<故渡部瞭会員『鵜沼を巡る千一話』第0011/0012話より>

「鵠沼を語る会」活動の記録

(令和元年7月～12月)

会誌 118 号製本作業（発行日 6 月 30 日 50 ページ）

7 月 1 日（月） 10 時～12 時 30 分 第 3 談話室 10 名参加
—160 部を製本。多くの会員の協力を得て予定より早めに終了した。

7 月例会

7 月 9 日（火） 10 時～12 時 第 1 談話室 17 名出席
—会誌『鵠沼』118号配付。欠席者へは配布担当の会員が届ける。
—歴史散歩について：国登録有形文化財・尾日向邸を見学。佐藤会員が折衝窓口を務める。併せて賀来神社も見学。11月実施予定。
—公民会まつりの展示準備。6 月例会で配付した「平成30年間の鵠沼を中心とした出来事」の一覧表を基に更に加える事項を列挙、いつの出来事だったかなどを話し合い、展示の仕方、制作スケジュールについても話した。

7 月運営委員会

7 月 30 日（火） 10 時～12 時 第 1 談話室 7 名出席

8 月例会

8 月 13 日（火） 10 時～12 時 第 1 談話室 11 名出席
—公民館まつり展示の準備。これまで話し合ってきた「平成30年間の鵠沼を中心とした出来事」をどのように展示するか、台紙にプリントした展示内容（A4 サイズ）を並べ展示の仕方を検討、決定した。9 月中の作成を目指す。
—歴史散歩（尾日向邸など）の進捗状況について佐藤会員より説明があった。
尾日向邸見学は、11月例会を歴史散歩に当て10時～11時とし、その後、賀来神社へまわることにした。

8 月運営委員会

8 月 27 日（火） 10 時～12 時 第 1 談話室 5 名出席

9 月例会

9 月 11 日（火） 10 時～12 時 第 1 談話室 12 名出席

—公民館まつりの展示物。台紙に A4 サイズの用紙に出来事、写真をプリントアウトしたものを貼り仕上げた。

—展示作業スケジュール並びに担当者、開催当日（10/19-20）の当番など必要事項を決定。

9月運営委員会

9月24日（火） 10時～12時 第2談話室 6名出席

10月例会

10月8日（火） 10時～12時 学習室① 12名出席

—公民館まつりの展示と役割分担について決めた。

—1月の歴史散歩：尾日向邸（資料配布）と賀来神社見学の参加希望を募る。

会員以外の方にも参加の声掛けをする。

—会誌『鵜沼』第119号について：原稿を再度、募集した。

10月運営委員会

10月29日（火） 10時～12時 第1談話室 5名出席

鵜沼地区公民館まつり

会期：10月19日（土）－20日（日）

開催時間：＜19日＞10時～16時 ＜20日＞10時～15時

当会展示テーマ：『平成をふりかえる』 展示場所：第3談話室

＜公民館まつり全体での当会の役割＞

10月16日（水）10時～ 椅子・机移動 パネル設置（竹内会員）

10月19日（土）14時30分～16時30分 分別ごみ監視（佐藤/持田会員）

10月21日（月）10時～ 椅子・机移動 パネル撤去（竹内会員）

＜当会での役割＞

10月17日（木）10時～12時 第3談話室 パネルに展示物の貼り付け作業

（岡田/大川/佐藤/原/竹内会員）— 台紙をパネルに貼ってゆくだけの作りにしたので1時間ほどで終了した。

10月19日（土）10時～13時 展示会場当番（佐藤/持田会員）

13 時～16 時 展示会場当番（大川/岡田会員）

10 月 20 日（日）10 時～12 時 展示会場当番（大川/岡田会員）

12 時～15 時 展示会場当番（岡田/原会員）

16 時～ 展示物撤去（岡田/原/持田/綿谷会員）

11月例会・歴史散歩

11月12日（火） 10時～12時 尾日向邸と賀来神社 23名参加

9 時 30 分 鵜沼公民館ロビーに集合。尾日向邸（鵜沼松が岡 1 丁目）へ直行組は、9 時 55 分集合。会員外も含め 23 名が参加。当主の尾日向梨沙氏の案内で広々した庭園をめぐり、縁側から内部に上がった。尾日向家、建物、陳列品などについて話を伺った。尾日向邸は平成 30 年に国登録有形文化財に指定された昭和 3 年ごろ建築の住宅で通常非公開になっている。

1 時間ほど滞在し、その後、片瀬川右岸縁へ出て、以前はここまで尾日向邸の庭だったことを確認。江ノ電鵜沼駅前から賀来神社へ上がり、勝海舟の扁額、石碑、本殿などを見学し、解散した。

11月運営委員会

11月26日（火） 10時～12時 第 1 談話室 6 名出席

12月例会

12月10日（火） 10時～12時 第 1 談話室 14名出席

—公民館まつりの展示並びに歴史散歩—尾日向邸と賀来神社見学について報告
—会誌『鵜沼』第 119 号の進捗状況ならびに今後の制作スケジュールを話した
—明年 1 月 16 日（木）の新年会について。参加申し込み受付。

〔お話〕鵜沼郷土資料展示室で開催中の『鵜沼海岸住民が創った鵜沼公民館 60 年のあゆみ』を内藤会員の説明で見学した。

12月運営委員会

12月17日（火） 13時～15時 第 1 談話室 6 名出席

会誌119号 編集作業終了（12/27）。12月30日を発行日とする。

<2019年12月現在 会員数 40名>

編集後記

■尾日向邸が尾日向家のご努力で登録有形文化財として保存されることになったのは誠に喜ばしいが、鵜沼別荘文化を残す試みは少々手遅れの感がある。現存物件があまりにも少ない。残っているのは、松が岡 2-5 井上邸と鵜沼海岸 2-12 国分邸くらいか。これらが滅失しないよう、祈るばかりである▼「藤沢の有形文化財・滴水庵を散策しましょう」というパンフレットを、いつどこで入手したか、はっきりしないのだが「もと鵜沼の益田別荘にあったもの」と書かれていたので市のホームページで確認し、現物を見たくて参加した。益田別荘跡地が分譲され、その一つに住む筆者としては「よくぞ保存して下さい」という格別の思いであった。(T.O)

■「遊行上人と時衆の時代」の原稿を書くに当たり、文中に挿入する清浄光寺(遊行寺)所蔵の絵画・写真の借用に特別なご配慮を頂きました。お陰さまで原稿を仕上げることができました。借用に際して、お骨折り頂きました遊行寺宝物館の三浦理香様に改めて深い感謝と御礼を申し上げます▼今回初めて編集にタッチして気が付いたことは、会誌ができて上がるまでには様々な工程があることです。用紙の購入から始まり、印刷室を取ったり、製本を行う部屋取り等、編集以外の仕事も多いので、まさに「会誌制作委員会」なるものを立ち上げ、執筆者以外にも参加して頂けると良いなあ、という感想を持ちました。(K.K)

■会誌制作の編集作業で人の書いた文章をいかに扱うかは、気を遣うところです。誤字・脱字、事実と異なる内容については手を入れることは当然ですが、文章の構成、言い回しは執筆者独自のものですから、むやみにいじることは避けなければなりません。ただこうした方がいいということであれば、きちんと説明し執筆者が納得したうえで、どう直すかを決めることです。執筆者の了解を得ずに変更すれば、ひと悶着あつて当たり前でしょう。この5年間、10号にわたり、このような気持ちで会誌『鵜沼』の編集作業をしてきました。同好会の会誌制作での文章の扱いは、ある面では市販雑誌の編集作業より気を遣うかもしれません▼むかしPR誌向けの顧客訪問の記事を二人の女性スタッフに同時に書いてもらいました。ベテランと新卒の二人。書いてきた文章を見ると、それぞれが良い視点で書かれていたので、両方の良い部分をつなぎひとつの記事にしたいと提案しました。即座に「どっちかにして！」と言、プイとそっぽを向かれました。数十年前の話ですが、なんと愚かな提案をしたのか、と今でもその時のことをはっきり思い出します。(弥)

『鵜沼』 第 119 号
令和元(2019)年 12 月 30 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>